

令和 2 年度

狭山市文化財年報

埼玉県狭山市教育委員会

例 言

- ・ 本書は、令和2年度の狭山市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財担当の年報である。
- ・ 本書に掲載した埋蔵文化財確認調査等は、事業者の協力を得て行った。
- ・ 発掘調査等に係る資料等の保管・活用は、狭山市教育委員会が行った。
- ・ 本書の執筆及び編集は、社会教育課文化財担当が行った。

目 次

I	組織・予算等	1
1	組織	1
2	文化財保護審議会	1
(1)	委員名簿	1
(2)	開催状況	1
3	予算・決算の状況	2
(1)	文化財保護事業費	2
(2)	文化財発掘調査事業費	2
(3)	博物館管理事業費	2
II	事業概要	3
1	調査・研究	3
(1)	画像・映像資料の収集・調査・研究	3
(2)	埋蔵文化財の調査	3
(3)	文化財関係資料の収集・調査・研究	6
2	管理	6
(1)	指定文化財の維持管理	6
(2)	災害時の文化財管理	6
(3)	文化財関係資料の整理・管理	6
(4)	博物館収蔵資料の整理・管理	7
3	補助	7
(1)	指定文化財管理事業補助	7
(2)	指定文化財（民俗芸能）の振興事業補助	7
4	普及・啓発	7
(1)	講座・展示	7
(2)	刊行物等	7
(3)	ホームページ等における公開	8
5	市民活動	8
(1)	博物館ボランティア「さやまナビーズ」	8
III	資料	9
1	狭山市の指定文化財	9
(1)	県指定文化財	9
(2)	市指定文化財	10
(3)	国登録有形文化財	14

2	狭山市内の遺跡一覧・遺跡分布図	15
IV	調査報告等	17
1	文化財関係資料調査報告	17
2	埋蔵文化財調査報告	22
3	博物館収蔵資料展示報告	25

I 組織・予算等

1 組織

教育委員会	教育長	向野 康雄					
	職務代理者	吉川 明彦					
生涯学習部	部長	金子 等					
	次長	内藤 光重					
社会教育課	課長	奥富 悟					
文化財・博物館担当	主査	安井 智幸	三ツ木 康介				
	主任	石塚 和則					
	主事	原 彩花					
文化財整理作業員	岸 幸子	橋本 弓子	江川久美子	名雲 教子	住谷三千代	山田久美子	
	安富 恵之						
文化財発掘作業員	小林はつみ	岡田 浩	中山 昇	渡辺 和久	村井 英子	山下 富廣	
	犬竹 幸夫						

2 文化財保護審議会

(1) 委員名簿

学識経験者	元埼玉県立歴史と民俗の博物館主任専門員兼学芸員	岩本 克昌
学識経験者	狭山歴史ガイドの会会員	川田 みな子
学識経験者	元公立小学校教諭	権田 恒夫
◎ 学識経験者	元狭山市立博物館長	高橋 光昭
学識経験者	元狭山市職員	名雲 康仁
学識経験者	元狭山市立博物館協議会委員	橋本 太郎
○ 学識経験者	元埼玉県立博物館長	林 宏一
学識経験者	狭山歴史ガイドの会会員	樋口 竹子
学識経験者	大東文化大学教授	宮瀧 交二

※ ◎：委員長、○：副委員長

(2) 開催状況

日程	議題等
第1回（7月31日）	（1）令和元年度事業報告について （2）令和2年度事業予定について （3）その他報告
第2回（3月23日）	（1）令和3年度予算について （2）文化財関係資料の評価について （3）その他報告

3 予算・決算の状況

(1) 文化財保護事業費

事業名	予算額	3,455,000	決算額	1,987,093
報酬		216,000		108,000
報償費		28,000		0
旅費		18,000		2,892
需用費		695,000		178,530
役務費		168,000		145,401
委託料		1,416,000		1,029,770
使用料及び賃借料		5,000		0
負担金補助及び交付金		902,000		514,300
公課費		7,000		8,200

※指定史跡修繕の実施箇所が予定していた範囲の一部であったこと、事業を中止した民俗芸能団体に交付した補助金を戻入した等の理由から、当初予算額と比して決算額が減額となった。

(2) 文化財発掘調査事業費

事業名	予算額	33,657,000	決算額	28,231,478
報酬		12,132,000		10,813,536
職員手当等		1,758,000		1,327,077
旅費		721,000		434,254
需用費		216,000		113,527
役務費		53,000		0
委託料		14,158,000		11,961,796
使用料及び賃借料		4,619,000		3,581,288

※当初の予定より任用する会計年度任用職員数を減じたことにより、当初予算と比して、報酬、職員手当等、及び旅費の決算額が減額となった。

(3) 博物館管理事業費

事業名	予算額	76,593,000	決算額	78,183,200
報酬		116,000		115,200
需用費		1,500,000		3,091,000
委託料		74,977,000		74,977,000

※狭山市立博物館の空調設備の修繕を予備費の充用により緊急に実施したため、当初予算額と比して、需用費（修繕料）の決算額が増額となった。

※単位：円

Ⅱ 事業概要

1 調査・研究

(1) 画像・映像資料の収集・調査・研究

No.	文化財名	指定文化財	撮影時期	備考
1	笹井豊年足踊り	○	-	行事が感染症対策で中止
2	お諏訪様のなすとっかえ	○	-	行事が感染症対策で中止
3	広瀬浅間神社の火祭り	○	-	行事が感染症対策で中止
4	八幡神社鹿子舞	○	-	行事が感染症対策で中止
5	入曽の獅子舞	○	-	行事が感染症対策で中止
6	上赤坂獅子舞	○	-	行事が感染症対策で中止
7	大国神社星祭	-	R2. 12. 21	デジタル写真・映像
8	常泉寺観音待	-	-	行事が感染症対策で中止
9	禅龍寺節分	-	-	行事が感染症対策で中止
10	野々宮神社節分	-	-	行事が感染症対策で中止
11	梅宮神社甘酒祭・西方囃子	○	-	行事が感染症対策で中止

(2) 埋蔵文化財の調査

ア 埋蔵文化財包蔵地照会

月別	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
窓口	84	80	114	174	144	170	162	175	121	118	134	180	1,656
電話	10	17	14	13	16	23	21	19	8	16	10	18	185
合計	94	97	128	187	160	193	183	194	129	134	144	198	1,841

イ 確認調査（令和2年度届出分）

No.	遺跡名	所在地	調査日	面積（㎡）	調査結果
1	台遺跡	大字青柳字台 43-5	R2. 4. 9	428. 62	遺構・遺物なし
2	上広瀬西久保遺跡	大字根岸字大道東 645-1 他 11 筆	-	5. 00	平成 30 年度確認調査済 （遺構・遺物なし）
3	上広瀬上ノ原遺跡	大字上広瀬外地内（笹井柏原線整備事業予定地内）	R2. 4. 21 ～4. 23	1679. 18	奈良平安時代遺構 3 件 （上広瀬上ノ原 2 次調査）
4	上広瀬古墳群	広瀬台 1-9-10	R2. 4. 27 ～4. 28、 9. 7	2162. 54	遺構・遺物なし
5	字尻遺跡	柏原字字尻 3688-2	R2. 4. 14	299. 00	工事立会い（遺構・遺物なし）
6	上広瀬西久保遺跡	大字上広瀬字西久保 649-6 他 66 筆	-	52391. 46	平成 28 年度確認調査済 （遺構・遺物なし）
7	下向沢遺跡	入間川字沢 1126-83、-34、-73、 -74、-77、-79、-81、-82	R2. 6. 5	402. 94	遺構・遺物なし
8	石無坂遺跡	入間川 1-4091-5	R2. 6. 9	200. 15	遺構・遺物なし
9	富士見北遺跡	富士見 1-6516-1	R2. 6. 15	499. 00	工事立会い（遺構・遺物なし）
10	上広瀬上ノ原遺跡	大字下広瀬字西原 599-1、600-1、 600-3	R2. 6. 16 ～6. 17	1837. 08	遺構・遺物なし

11	小山ノ上・鳥ノ上遺跡	柏原 1267-2 の一部、-4、-5	R2. 6. 18 ～6. 25	831. 40	奈良平安時代遺構 1 件
12	御所の内遺跡	柏原字御所ノ内 2428-10	R2. 6. 23	300. 34	遺構・遺物なし
13	上広瀬上ノ原遺跡	大字上広瀬外地内(笹井柏原線整備事業予定地内)	R2. 12. 17	8204. 00	工事立会い(遺構・遺物なし)
14	石無坂遺跡	入間川 1-4058-5、4058-8	R2. 7. 13	160. 96	遺構・遺物なし
15	上広瀬西久保遺跡	大字根岸字大道東 648-4、649-25、大字上広瀬字西久保 1182、1184、1185-1、-2、1186-1、-2、-6、-7、-8、-9、-10、1187-1、1200-1、-2	-	10017. 13	平成 28 年度確認調査済 (遺構・遺物なし)
16	戸張遺跡	大字上奥富字戸張 198-1	-	2. 25	平成 4 年度確認調査済 (遺構・遺物なし)
17	宮ノ越遺跡	柏原 3618-42	-	1. 00	昭和 53・54 年度発掘調査済
18	金井上遺跡	大字笹井 617-7	R2. 8. 3	189. 02	工事立会い(遺構・遺物なし)
19	御所の内遺跡	柏原 2428-7、-12	R2. 8. 19	300. 68	遺構・遺物なし
20	城ノ越遺跡	柏原字城ノ越 2337-10、2337-11 の一部	-	259. 81	平成 29 年度発掘調査済
21	揚樋木遺跡	大字上奥富字新堀 98-1	R2. 8. 31	391. 93	遺構・遺物なし
22	城ノ越遺跡	柏原字宮原 2249-9	R2. 9. 2	300. 92	遺構・遺物なし
23	石無坂遺跡	入間川 1-4063	R2. 9. 14 ～9. 15	1054. 00	遺構・遺物なし
24	城ノ越遺跡	柏原 1652-1、1650-2	R3. 4. 26	304. 82	工事立会い(遺構・遺物なし)
25	富士見北遺跡	富士見 1-6516-1	R2. 9. 28	494. 57	遺構・遺物なし
26	揚樋木遺跡	大字上奥富字揚樋木 21-1、-2、22-1、-2	R2. 10. 5 ～10. 6	749. 00	奈良平安時代遺構 1 件 (現況保存)
27	上広瀬古墳群	広瀬台 1-464-1、462-1、462-3	-	5. 00	令和 2 年度確認調査済 (遺構・遺物なし)
28	富士見北遺跡	富士見 1-2985-4、-10	R2. 10. 19	269. 36	遺構・遺物なし
29	中原遺跡	狭山 662-16	R2. 11. 7	132. 23	工事立会い(遺構・遺物なし)
30	中原遺跡	狭山 1892-12、-13、-14	R2. 10. 26	200. 27	工事立会い(現況保存)
31	上広瀬古墳群	広瀬台 1-462-1、462-9	-	4. 00	平成 16 年度確認調査済 (遺構・遺物なし)
32	滝祇園遺跡	入間川 2-2264-1	R2. 10. 29	522. 38	工事立会い(遺構・遺物なし)
33	中原遺跡	狭山 17-32	R2. 11. 7	132. 23	工事立会い(現況保存)
34	上広瀬上ノ原遺跡	大字上広瀬 1299-1、1300-1 地先、1300-1	R2. 12. 17	7. 00	工事立会い(遺構・遺物なし)
35	上広瀬上ノ原遺跡	大字上広瀬 1302-1、1302-1 地先、1303-1 地先、1303-3 地先	R2. 12. 17	6. 00	工事立会い(遺構・遺物なし)
36	上広瀬上ノ原遺跡	大字上広瀬 603-1、603-1 地先、600-2	R2. 12. 17	5. 00	工事立会い(遺構・遺物なし)

37	上広瀬上ノ原遺跡	大字上広瀬 1306-1、1306-4	R2. 12. 17	2. 00	工事立会い（遺構・遺物なし）
38	上広瀬上ノ原遺跡	大字上広瀬 1306-1、573-3 地先、 574-8、575-8	R2. 12. 17	9. 00	工事立会い（遺構・遺物なし）
39	上双木遺跡・鳥ノ 上遺跡・小山ノ上 遺跡	柏原字上双木 905-1 他 81 筆	-	72578. 47	平成 30 年度～令和 2 年度 発掘調査済
40	中原遺跡	狭山 1-3	R3. 1. 28	180. 17	工事立会い（遺構・遺物なし）
41	富士見南遺跡	富士見 2-6231-6	R2. 11. 26	132. 24	遺構・遺物なし
42	沢久保遺跡	入間川字沢久保地内（狭山市駅加 佐志線整備事業予定地内）	R3. 4. 1	737. 78	工事立会い（遺構・遺物なし）
43	宮ノ越遺跡	柏原字宮ノ越 3630-66	-	222. 21	昭和 53・54 年度発掘調査済
44	御所の内遺跡	柏原字英 1520-2	R3. 1. 14	2. 25	工事立会い（遺構・遺物なし）
45	霞ヶ丘遺跡	大字上広瀬字霞ヶ丘 928	R3. 3. 19	9. 38	工事立会い（遺構・遺物なし）
46	上広瀬西久保遺跡	大字下広瀬字西野 747-1、747-3、 747-4、748-1	R3. 1. 15	6230. 00	遺構・遺物なし
47	中原遺跡	狭山 668-1、-2、669	R3. 1. 21	3453. 00	奈良平安時代遺構 4 件 （現況保存）
48	宮ノ越遺跡	柏原字宮ノ越 3630-66	-	222. 21	昭和 53・54 年度発掘調査済
49	揚榎木遺跡	大字上奥富字平塚 248-6	R3. 3. 19	88. 48	工事立会い（遺構・遺物なし）
50	上広瀬上ノ原遺跡	大字上広瀬外地内（笹井柏原線整 備事業予定地内）	R3. 3. 1	826. 50	遺構・遺物なし
51	八木上遺跡	大字笹井字西八木 2742-1	R3. 3. 18	114. 00	遺構・遺物なし
52	金井上遺跡	大字笹井字東原 617-5、-6、-7、 -8、-9、-10、-11、-12、-13、-15	R3. 3. 22	1, 475. 19	遺構・遺物なし
53	字尻遺跡	柏原字字尻 3681-1 他 8 筆	-	9929. 00	平成 4 年度確認調査済 （遺構・遺物なし）
54	宮原遺跡	柏原字上宿 1669-3	R3. 5. 14	142. 47	工事立会い（R3 年度確認調査 実施予定）
55	字尻遺跡	柏原字字尻 3684-1、3685-22	-	3946. 00	平成 4 年度確認調査済 （遺構・遺物なし）

※令和 2 年度実施の発掘調査費用の実態調査及び発掘届等の統計調査に準拠。

※対象総面積 185, 050. 62 ㎡。

ウ 発掘調査

No.	調査名	所在地	調査期間	面積（㎡）	調査結果
1	狭山工業団地拡張地区 基盤整備事業発掘調査 （鳥ノ上・小山ノ上・上 双木遺跡）	柏原字上双木 908-13 外	R2. 4. 1～ R2. 10. 13	2, 100	奈良・平安時代掘立柱建物跡 4 棟、溝跡 2 条、土壇 5 基
2	笹井柏原線整備事業予 定地内発掘調査（上広 瀬上ノ原第 2 次調査）	大字上広瀬外地内（笹井柏 原線整備事業予定地内）	R2. 5. 27 ～R2. 10. 12	150	奈良・平安時代掘立柱建物跡 2 棟、遺物包含層 1 か所

※1 調査内容は令和 2 年度実施分のみ記載（IV 報告等 4 参照）。

エ 出土品等整理作業

文化財センターで、出土品の接合・実測等の整理作業を実施。

No.	調査名	洗浄	注記	接合	拓本	実測	トレース	図面整理	原稿執筆
1	宮地遺跡第7次	－	－	－	－	10点	－	－	－
2	鳥ノ上遺跡第3次	コンテナ12	コンテナ26	コンテナ26	－	－	－	272点	50点
3	上広瀬上ノ原第2次調査	コンテナ1	コンテナ1	－	－	－	－	3点	－
4	確認調査	－	－	－	－	－	－	13点	－

(3) 文化財関係資料の収集・調査・研究

No.	資料名	作業日	作業概要
1	入間川松本家関係資料	R2. 9. 8	受贈（袖搦3点：江戸後期）、収蔵に係る簡易な清掃処理
2	入間川甲田家関係資料	R2. 9. 15	受贈（昭和初期旅行資料一式）、収蔵に係る簡易な清掃処理
3	リトグラフ「蝶」	R2. 11. 1	受贈（美術品1点）、収蔵に係る簡易な清掃処理
4	水富村役場社寺調編冊	R2. 12. 15	受贈（文書1点：明治後期）、収蔵に係る簡易な清掃処理
5	柏原防風林関係資料	継続中	受贈（文書2点：昭和初期）、収蔵に係る簡易な清掃処理
6	大山講 神酒杵	－	簡易調査報告の作成

2 管理

(1) 指定文化財の維持管理

No.	業務・事業名	形態	実施等団体名
1	埼玉県指定史跡七曲井除草管理業務（2回）	委託	（株）狭山緑化土木
2	城山砦跡内除草管理業務（2回）	委託	（株）狭山緑化土木
3	史跡富士塚内除草管理業務（1回）	委託	（株）狭山緑化土木
4	影隠地蔵除草管理業務（清掃12回、除草2回）	委託	水富地区根山自治会
5	今宿遺跡除草管理業務（清掃、除草3回）	委託	日生さやま台自治会
6	今宿遺跡公園内樹木（スダジイ）伐採業務（1回）	委託	（株）晃翔造園
7	今宿遺跡公園内樹木（トウカエデ・ウメ）伐採業務（1回）	委託	（株）富士造園
8	下水野の地蔵尊除草管理業務（清掃、除草12回）	委託	下水野自治会
9	富士塚内樹木伐採及び倒木処分業務（1回）	委託	（株）道心造園
10	城山砦跡内仮設柵設置業務	工事	（株）狭山緑化土木

(2) 災害時の文化財管理

災害等による被害なし。

(3) 文化財関係資料の整理・管理

No.	整理対象	作業概要	数量
1	寄贈報告書	受付処理一覧表作成	210冊
2	藤本一美関係資料	内容確認、仮台帳作成	718件
3	遠藤三郎関係資料	図書分類	－
4	狭山市史編纂写真資料	一覧表作成	449件

(4) 博物館収蔵資料の整理・管理

月別	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
資料清掃	-	36	227	101	230	40	59	14	33	4	5	60	809
資料修繕	-	36	227	7	6	20	8	13	6	3	0	1	327
資料撮影	-	39	29	68	51	100	43	28	29	63	140	103	693
台帳校正	-	135	295	265	52	190	53	158	187	253	100	77	1,765
台帳追加	-	30	12	113	37	11	23	32	60	11	58	58	445
カード修正	-	11	0	104	48	56	52	118	104	56	69	69	687
カード追加	-	18	7	9	7	23	17	26	27	86	56	51	327
カードスキャン	-	0	0	0	1,257	110	31	248	119	122	0	372	2,259

※狭山市文化財関係資料取扱要綱に則り随時実施した。

3 補助

(1) 指定文化財管理事業補助

No.	実施等団体名	事業内容
1	廣瀬神社	廣瀬神社の大ケヤキ樹勢回復事業
2	広瀬囃子保存会	木彫り面修繕事業
3	八幡神社	清水八幡修繕事業

(2) 指定文化財（民俗芸能）の振興事業補助

No.	実施等団体名	事業内容
1	入曽の獅子舞保存会	入曽の獅子舞後継者育成（中止・R3.5.10 戻入済）
2	梅宮神社甘酒祭保存会	梅宮神社甘酒祭後継者育成（中止・R3.5.18 戻入済）
3	入間川鹿子舞保存会	入間川の鹿子舞後継者育成（中止・R3.4.30 戻入済）
4	狭山市民俗芸能祭囃子連合会	狭山市民俗芸能祭囃子後継者育成（一部中止・R3.5.11 戻入済）
5	上赤坂の獅子舞保存会	上赤坂の獅子舞後継者育成（中止・R3.4.30 戻入済）
6	柏原郷土芸能会	柏原祇園囃子後継者育成

4 普及・啓発

(1) 講座・展示

No.	開催日	事業名	場所	人数等	主な内容
1	R2.10.14	出前講座	市民会館	45	鳥ノ上遺跡発掘調査についての講座
2	R2.11.24	学校講座	広瀬小学校	89	遺跡見学解説、4年生
3	R3.1.21	狭山市文化財防火啓発事業	-	-	各指定文化財の特性ごとに想定される火災リスクや、防火についての基本的な考え方等の主な項目を「火災リスクチェックリスト」として紹介、配布
4	R3.3.22	狭山市文化財Web講演会	狭山市立公民館公式YouTube	視聴回数 191 回 (R3.5.18 現在)	第1回「埋蔵文化財とは」など 第2回「検出遺構」など 第3回「出土遺物」など

(2) 刊行物等

特になし。

(3) ホームページ等における公開

No.	タイトル	備考等
1	文化財のしおり（市内に所在する文化財の紹介）	公式ホームページ掲載
2	令和元年度 文化財年報	公式ホームページ掲載
3	田中雅美写真展オーロラの旅へ（博物館企画展パンフレット）	公式ホームページ掲載
4	私たちの災害サバイバル展（博物館企画展パンフレット）	公式ホームページ掲載

5 市民活動

(1) 博物館ボランティア「さやまナビーズ」

No.	事業名	活動内容	活動人数	活動延べ日数
1	第5回冬季 さやはくフォーラム	講師	3	3
2	第5回 常設展ガイドツアー	展示解説	8	167
3	小学校社会科見学会	展示解説	1	7
4	私たちの災害サバイバル展	「水害リスク情報図」ほか展示物製作	7	142
5	収蔵品展入間川商店街	「家屋模型」製作	7	120
6	収蔵品整理	整理補助	12	277
7	軒研究会	研究	10	61
8	工作教室、まいまい体験講座	工作補助、材料加工	7	29

Ⅲ 資料

1 狭山市の指定文化財

(1) 県指定文化財

ア 工芸品

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
1	S29. 10. 23	さはりの壺	入間川 3-6-14	八幡神社	「さはり」とは、銅を主として錫・鉛（または銀）を加えた、黄白色の合金のことである。壺の高さ 18.7cm、直径 10cm、口径 7cm。

イ 古文書

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
2	S34. 3. 20	篠井家文書	笹井	個人蔵	篠井家は江戸時代まで笹井観音堂とよばれた本山派修験・聖護院末 28 院の 1 寺院で、その修験関係文書 16 通が指定を受けている。 ※笹井観音堂は滝音山泊山寺と呼ばれた寺院

ウ 無形民俗文化財

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
3	S54. 3. 27	入曽の獅子舞	南 入 曽 460 金剛院 南 入 曽 641 入間野神社	入 曽 の 獅 子 舞 保 存 会	毎年 10 月に、金剛院と入間野神社に奉納される。 1 日目は金剛院で揃獅子を、2 日目は金剛院で前 狂い・入間野神社で全曲が奉納される。
4	H4. 3. 11	梅宮神社の甘酒祭り	上 奥 富 508 梅宮神社	梅 宮 神 社 甘 酒 祭 保 存会	毎年 2 月 10 日に座揃式、2 月 11 日に大祭が行わ れる。関東地方には珍しい頭屋制（氏子組の輪番 制）で祭が運営されている。

エ 史跡

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
5	S24. 2. 22	七曲井	北入曽 1366	常泉寺	武蔵野の歌枕として名高い「ほりかねの井」と呼 ばれる井戸の 1 つ。9 世紀後半から 10 世紀前半 にかけて掘られたと考えられる。

オ 旧跡

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
6	S36. 9. 1	堀兼之井	堀兼 2220	堀兼神社	枕草子や千載和歌集で「ほりかねの井」とよばれ る漏斗状井戸の 1 つ。直径 7.2m、深さ 1.9m。

カ 天然記念物

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
7	H10. 3. 17	広瀬神社の大ケヤキ	広瀬 2-23-1	広瀬神社	1 本が高さ約 32m、幹周り約 6. 3m、もう 1 本が高さ約 27m、幹周り約 6. 1m。樹齢はいずれも約 800 年と推定され、まれにみる巨木である。
8	H15. 3. 18	笹井産出アケボノゾウ 骨格化石	稲荷山 1-23-1 博物館	狭山市	アケボノゾウは体高 1. 5～1. 8m、体重 2～3t と推定され、小柄で長いキバを持つ。入間川流域の笹井で骨格化石が発掘されている。

(2) 市指定文化財

ア 建造物

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
9	S48. 3. 1	天岑寺惣門	沢 5-34	天岑寺	総檜材で、屋根は瓦葺切妻、門全体は沖縄風の様式が感じられる。表間口 3. 64m、奥行き 3m の四脚門である。
10	S48. 3. 1	広福寺山門	下奥富 844	広福寺	白壁が美しい竜宮造りの建築様式をとり、入母屋造りの瓦葺屋根の下は鐘楼になっている。
11	S48. 3. 1	八幡神社本殿	入間川 3-6-14	八幡神社	唐破風向拝付、千鳥破風付入母屋造りという建築様式で、周囲には見事な彫刻が施されている。
12	S61. 11. 1	隨身門及び二神像	堀兼 2220	堀兼神社	市内唯一の隨身門で、桁行 6. 85m、梁行 4. 12m、単層入母屋造りの八脚門である。朱塗り門の両側には神像が安置されている。

イ 絵画

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
13	S50. 3. 1	白鬚神社韋駄天の額	柏原 1153	柏原白鬚神社	絵馬様式で、幅 179cm、左右の高さ 113cm、中央の高さ 131cm。宝棒を振り上げ、仏舎利を奪った魔王を追いかけている姿が描かれている。
14	S51. 4. 1	仙人の図	柏原	個人蔵	鉄拐（てっかい）と蝦蟇（がま）が一幅ずつ描かれ、2 つで一对をなしている。柴田是真（1807～1891）作。
15	S50. 3. 1	ねずみの図	柏原 1059 (博物館に 寄託)	西浄寺	木の額に描かれた彩色画で、たくさんのねずみが張子の小槌を作っている姿が描かれている。河鍋暁斎（1831～1889）作。
16	S52. 9. 1	桃園三傑図	上奥富 508	梅宮神社	劉備・関羽・張飛の 3 人が、桃の木の下に会し、兄弟の盟を結んでいるところが描かれている。縦 125cm、横 180cm、堤等琳作。
17	S61. 11. 1	絹本着色釈迦涅槃図	入間川 2-3-11	徳林寺	釈迦が亡くなったときに、弟子や諸王らが嘆き悲しんでいる姿が描かれている。縦 177. 5cm、横 104cm。

18	S61. 11. 1	絹本着色釈迦八相図	入間川 2-3-11	徳林寺	釈迦の生涯における主要な事跡を、絹本着色釈迦涅槃図と合わせて八つとなるように描いたもの。縦 188.5cm、横 105cm。
19	S61. 11. 1	紙本着色両界曼荼羅	上奥富 354	瑞光寺	金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅からなる二幅の絵画で、和紙に彩色で描かれている。いずれも、縦 90.5cm、横 81cm。
20	S61. 11. 1	紙本地蔵十王図付他二幅	根岸 2-5-1	明光寺	十王、地蔵菩薩、脱衣婆、修羅の図を合わせて十三幅からなる仏画。いずれも、縦 93cm、横 39cm。

ウ 彫刻

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
21	S51. 4. 1	慈眼寺阿弥陀如来像	入間川 1-9-37	慈眼寺	ケヤキの一木造。均衡のとれた姿をし、豊かな顔立ちをしている。像高 73cm。
22	S61. 11. 1	木造聖観世音菩薩坐像	北入曽 1366	常泉寺	観音堂の本尊。左手はつぼみの蓮華を持ち、右手は掌を開いて施無畏印を結んでいる。寄木造、像高 54cm。
23	S61. 11. 1	木造地藏菩薩立像	南入曽 460	金剛院	左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、顔立ちは豊かで穏やかである。寄木造、像高 79cm。
24	S61. 11. 1	銅造聖観世音菩薩立像	柏原 1027	円光寺	通肩の法衣を着て、頭髮は宝髻（ほうけい）に結い、左手に蓮華のつぼみを持ち、右手は施無畏印を結んでいる。像高 41.5cm、全体高 48cm。
25	S61. 11. 1	木造不動明王及び二童子立像	柏原 2492	永代寺	両眼を大きく開き、右手に剣、左手に索を持った不動明王が、二童子を従えた一組の像である。不動明王の像高 72.2cm、二童子の像高 41.7cm。
26	S61. 11. 1	木造千手観世音菩薩坐像	広瀬 2-20-1	禅龍寺	11 面 42 手を持ち、光背は舟形の透かし彫りで、雲の中に 11 面の円鏡が散りばめられている。像高 64.6cm。
27	S61. 11. 1	木造宝冠釈迦如来坐像	笹井 2-17-8	宗源寺	口元から少し白い歯をのぞかせていることから、歯仏とか微笑釈迦牟尼仏ともいわれている。像高 38cm。
28	H29. 2. 1	木造薬師三尊像並びに十二神将像	東三ツ木 8-1	天岑寺	薬師如来坐像は応永 6 年（1399）常仁の作で寄木造、十二神将像は一木造で、作風から、鎌倉時代後半から室町時代にかけて鎌倉を中心に流行した様式のものと考えられる。日光・月光菩薩像も一木造だが、他の像と違い、江戸時代前期のものと考えられる。

エ 工芸品

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
29	S51. 4. 1	梅宮神社鰐口	上奥富 508	梅宮神社	鰐口は、下方に大きな割れ目があり、布縄で参拝者がたたき鳴らす丸型の鳴器のこと。現在は片側のみ残っている。青銅製、直径 14cm。

30	S61. 11. 1	御正体（懸仏）	柏原 1153	柏 原 白 鬚 神社	全部で5面ある。大小の違いはあるものの、青銅の鋳物で円鏡型をなし、十一面観世音菩薩像が鋳出されている。
31	S61. 11. 1	大水作鎗	柏原	個人蔵	柏原の鎗鍛冶師、増田大水の作で、「武州柏原住大水作」という銘文が刻まれている。全長67.8cm、穂先の長さ23.5cm。
32	S61. 11. 1	神輿	広瀬 2-23-1	広瀬神社	宝形造で、屋根の頂上には鳳凰が立つ、豪華絢爛な神輿。下框の長さ122cm、屋根上鳳凰までの高さ228cm。
33	H29. 2. 1	堀兼神社(富士浅間社) 本殿厨子附 棟札一枚	堀兼 2220	堀兼神社	本殿厨子は、黒漆塗りで、前面の扉や梁に、当時流行した意匠や図柄が彫り込まれ、江戸時代前期から中期ごろの武蔵国農村地域の宗教建築の特徴を残している。また、本殿建立の経過が棟札に記載され、神社の歴史が明らかになった。

オ 書跡

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
34	S52. 9. 1	梅宮神社神号	上奥富 508	梅宮神社	「梅宮神社」と彫られた部分に白色塗装が施された木製額。筆者は、儒学者・亀田鵬斎。縦43.7cm、横115.6cm。

カ 古文書

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
35	S51. 4. 1	広瀬村境界絵図面及び 分見野帳	広瀬	個人蔵	江戸期、入間川が氾濫するたび兩岸の村との境界が不明瞭となり、その境界をはっきりさせるために、この図が作られた。

キ 無形文化財

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
36	S52. 9. 1	笹井豊年足踊り	笹井 1962 笹井白鬚神社	笹 井 豊 年 足 踊 り 保 存 会	笹井囃子の演目の1つ。一人の演者が仰向きに寝て両足を立て、足の甲に面（ひょっとこ・おかめ）をつけ、衣装を着せ、囃子に合わせて演じるものである。

ク 無形民俗文化財

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
37	S46. 4. 1	八幡神社鹿子舞	入間川 3-6-14 八幡神社	入 間 川 鹿 子 舞 保 存 会	神仏分離政策のとき「獅子でなく鹿子である」といって禁をまぬがれたといわれ、「各盞の儀」と呼ばれる儀式が行われるのも特徴である。
38	S52. 9. 1	広瀬囃子	広瀬 2-23-1 広瀬神社	広 瀬 囃 子 連	江戸末期、笛の村木佐平、天狐の飯島喜十郎を中心におこり、県内では珍しい神田古囃子を今に伝えている。

39	S52. 9. 1	入曽囃子	北入曽 274-1 野々宮神社	入 曽 囃 子 保存会	地元の里神楽を土台に、江戸徳丸より芸人を招き、田口保明など土地の有志に伝授され始まったといわれている。
40	H9. 6. 2	広瀬浅間神社の 火まつり	上広瀬 983-2 富 士 浅 間 神 社	水 富 ㊦ 講 中	養蚕の豊作、安産、富士山の鎮火を祈願するために行われる。祭の中心となる「お焚き上げ」は、桑の枝を円柱状に束ねた大・小のたいまつを燃やすもので、近隣には見られない大変貴重なものである。
41	H9. 6. 2	お諏訪さまの なすとっかえ	入間川 4-2-41 諏訪神社	社 務 所 管 理委員会	自作のなすを奉納し、神前に供えてある別のなすをもらって帰り食べると、暑気あたりなど疫病一切に霊験あらたかとされている。
42	H15. 11. 4	西方囃子	奥富地区	西 方 囃 子 保存会	江戸時代に入曽囃子より伝わり、江戸神田囃子の流れをくむ。大正年間、一時途絶えた入曽囃子に逆に伝授したといわれている。
43	H15. 11. 4	柏原祇園囃子	柏原地区	柏 原 郷 土 芸能会	入間市高倉から伝えられた市内唯一の祇園囃子。柏原八坂神社の「天王さま」の夏祭り等で上演されている。
44	H17. 12. 1	上赤坂獅子舞	上赤坂地区	上赤坂獅子 舞保存会	一人立ち三頭のササラ獅子舞。古い太鼓の内側には「安永 2 年（1773）9 月修理」と記されていた。

ケ 有形民俗文化財

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
45	S48. 3. 1	天岑寺月待供養の碑	沢 5-34	天岑寺	幅 40cm、高さ 131cm という大型の板碑で、阿弥陀三尊来迎図が描かれている。市内に約 300 基ある板碑の中でも代表的なものである。
46	S61. 11. 1	絵馬「子返しの図」	柏原 1153	柏 原 白 鬚 神社	「間引き」（口べらしのために親が生児を殺すこと）をいましめるために奉納されたもの。木製額型で、縦 44.3cm、横 81.7cm。「陰陽和合図」と一対と考えられる。
47	H25. 2. 1	絵馬「陰陽和合図」	柏原 1153	柏 原 白 鬚 神社	富士信仰に基づく産育や孝行の思想を絵解きする内容の絵馬。木製額型で、縦 44.3cm、横 81.7cm。「子返しの図」と一対と考えられる。

コ 史跡

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
48	S48. 3. 1	清水濱臣の墓	狭山 531	天岑寺	濱臣は江戸中期の高名な国学者。父・道円が、川越在田中村（現・狭山市狭山）の出身という関係で安穩寺（廃寺）跡に墓がある。
49	S52. 9. 1	清水八幡	入間川 3-35-9	八幡神社	入間河原で源頼朝の追手に討ち果たされた、清水冠者義高（源義仲の嫡子）をまつるために造られたと伝えられている。

50	S50. 3. 1	生越道々標	下奥富 496-3	狭山市	昔は武蔵野の一本松道標と呼ばれた。石造角柱型の4面には東西南北と刻まれ、それぞれの行き先地が書かれている。
51	S48. 3. 1	城山砦跡	柏原 2346-2 他	小谷野家・ 早川家・狭 山市	市内唯一の中世城郭で、別名「上杉砦」ともいわれる。「川越夜戦」で上杉憲政などが陣を敷いたと伝えられている。
52	S51. 4. 1	今宿遺跡	広瀬台 1-22	狭山市	縄文早期から奈良・平安時代（弥生を除く）の住居跡や古墳が数多く見つかり、その内の住居跡3軒が保存（1軒は復元）されている。
53	S52. 9. 1	影隠地藏	柏原 204-1	狭山市	源頼朝の追手に追われた清水冠者義高が、この地藏尊の影に隠れて難を逃れた、との言い伝えがある。
54	S55. 6. 2	清水宗徳之墓	上広瀬 976 付近	清水家	清水宗徳は、器械製糸工場の開設、入間馬車鉄道の敷設などを行い、県議会議員・衆議院議員としても地域発展のために貢献した人である。
55	H18. 12. 1	旗本小笠原家墓所	沢 1120-1	天岑寺	天岑寺を開基した小笠原氏 12 代にわたる家族の墓所。宝篋印塔・笠付角柱型墓石など 43 基の墓塔がある。
56	H25. 2. 1	下水野の地藏尊	南入曽 63-1 先	狭山市	水野の新田開発にかかわり亡くなった人を供養するとともに、その子孫の現世と来世の安楽を願って造られたと考えられている。

サ 天然記念物

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
57	S48. 3. 1	羽黒神社菩提樹	加佐志 174	羽黒神社	シナノキ科落葉高木で、6・7 月頃淡黄色の花が咲き、葉の裏に直径 8mm ほどの実を結ぶ。高さ約 10m、幹周り約 1.9m、樹齢約 550 年。

シ 考古資料

No.	指定 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
58	R1. 7. 1	注口付き壺形土器	稲荷山 1-23-1 博物館	狭山市	加曾利 E II 式期の注口土器事例としては、県内では類例がない。また、土瓶形、急須形に定形化する縄文時代後・晩期（約 4,000～2,500 年前）以前の資料で、器形が後期土瓶形注口土器の系譜上にあることを示唆しており、注口土器の変遷を考えるうえでも非常に重要な資料といえる。

(3) 国登録有形文化財

No.	登録 年月日	名称	所在地	所有者 (管理者)	概要
1	H30. 11. 2	東京ゴルフ倶楽部クラブハウス	柏原 1957-5	東京ゴルフ倶楽部	建築家アントニン・レーモンドによる設計で、レーモンドの作風が顕著に現れた円熟期の秀作と評価されている。

2 狭山市内の遺跡一覧・遺跡分布図

【狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）】

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 東八木窯跡群（22049）奈・平 | 35 宮原遺跡（22017）縄（前～後） |
| 2 八木遺跡（22068）縄（前・中）、奈・平 | 36 下双木遺跡（22078）縄（草） |
| 3 八木北遺跡（22021）奈・平 | 37 上双木遺跡（22077）縄（中・後）、奈・平 |
| 4 八木上遺跡（22022）縄（前・中）、奈・平 | 38 上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平 |
| 5 沢口上古墳群（22020）古（後） | 39 西久保遺跡（22069）先、縄（草）、奈・平 |
| 6 笹井古墳群（22019）古（後） | 40 東久保遺跡（22070）先 |
| 7 沢口遺跡（22080）縄（早～中）、古、奈・平 | 41 上諏訪遺跡（22086）縄（中・後） |
| 8 宮地遺跡（22018）縄（中）、奈・平 | 42 滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）、古、奈・平 |
| 9 金井遺跡（22071）中 | 43 峰遺跡（22024）縄（中・後）、奈・平 |
| 10 金井上遺跡（22023）縄（草・前）、奈・平、中 | 44 戸張遺跡（22026）縄（前・中）、奈・平 |
| 11 上広瀬上ノ原遺跡（22007）縄（草）、奈・平 | 45 揚樋木遺跡（22027）縄（前・中）、奈・平 |
| 12 霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）、奈・平 | 46 坂上遺跡（22030）縄（中）、奈・平 |
| 13 今宿遺跡（22002）縄（早～中）、奈・平 | 47 稲荷上遺跡（22032）縄（前・中）、奈・平 |
| 14 上広瀬古墳群（22001）古（後） | 48 上中原遺跡（22039）先 |
| 15 森ノ上西遺跡（22079）先 | 49 中原遺跡（22038）縄（早～後）、奈・平 |
| 16 森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平 | 50 沢台遺跡（22079）縄（中）、奈・平 |
| 17 富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平 | 51 沢久保遺跡（22041）縄（中） |
| 18 鳥ノ上遺跡（22010）奈・平 | 52 下向沢遺跡（22042）縄（中・後）、奈・平 |
| 19 小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）、古～中 | 53 吉原遺跡（22067）縄（前） |
| 20 御所の内遺跡（22012）奈・平 | 54 下向遺跡（22085）縄（前～後） |
| 21 英遺跡（22074）奈・平、中 | 55 台遺跡（22084）縄（前～後） |
| 22 城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）、奈・平、中 | 56 稲荷山公園古墳群（22052）古（後） |
| 23 宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）、奈・平 | 57 稲荷山公園遺跡（22051）縄（中） |
| 24 字尻遺跡（22075）縄（前～後）、奈・平 | 58 石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平 |
| 25 丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平 | 59 富士見西遺跡（22082）縄（中）、奈・平 |
| 26 金井林遺跡（22035）縄（前～後） | 60 富士見北遺跡（22072）縄（前・中）、奈・平 |
| 27 鶴田遺跡（22044）縄（前・中） | 61 富士見南遺跡（22081）縄（中） |
| 28 上ノ原東遺跡（22065）奈・平 | 62 町屋道遺跡（22088）縄（前～後）、奈・平 |
| 29 上ノ原西遺跡（22063）縄（中） | 63 七曲井（22046）中 |
| 30 半貫山遺跡（22061）中 | 64 堀兼之井（22047）中 |
| 31 稲荷山遺跡（22058）縄（後） | 65 八軒家の井（22076）中 |
| 32 前山遺跡（22059）縄（中） | 66 八木前遺跡（22087）縄（前・後） |
| 33 高根遺跡（22062）縄（早・中・後） | 67 堀難井遺跡（22089）中 |
| 34 町久保遺跡（22034）縄（中）、奈・平、中 | |

※先：先土器時代、縄：縄文時代、古：古墳時代、奈・平：奈良・平安時代、中：中世



IV 調査報告等

1 文化財関係資料調査報告 大山講 神酒杵 一基

文化財担当 安井 智幸

(1) 資料名及び経過

「大山講 神酒杵 一基」

令和元年9月4日、上広瀬在住の住民より、所蔵する伝来の資料多数を引き取らないかとの連絡があった。当日、現場にて、文化財担当職員が実見し、写真撮影と簡単な計測をい、多数の資料の内の一つとして受贈した。

(2) 資料の実際の使用方法

神酒杵はおよそ60センチメートルの社殿建築様の細工物の外見をしている運搬具である。神酒杵の中に神酒や霊水を入れた瓶子を納めた後、天秤棒の両端に二基一對の神酒杵を差し込み、担いで運搬した。江戸時代の後半に流行した大山講で使用されるもので、講の代参（全員ではなくて、数人が代表して参詣すること）として大山を詣でた講員は、神社から受けた神酒をこの神酒杵に納めて持ち帰り、村で新たな酒を継ぎ足して講中全員にこれを配ったとされる。



※国立国会図書館デジタルコレクション「東海道五十三次細見図会・程ヶ谷」より

(3) 形状

一間社、唐破風、欄干、台座型、二基一對のうち一基。錫製神酒樽付属。

(4) 品質・構造

神酒杵本体は木造、総檜造りか。釘を使わない組み立て式。屋根は黒漆塗り。外観は神輿様に作られ、柱なども細く見えるように仕上げられているが、実際は外観の柱の4倍の太さの角材の一つの角を装飾彫刻したもので、基本構造は堅牢になっている。須弥壇様の脚を持ち、その上に繰形を伴う小壁が乗る。四方の小壁には竜の腰彫が施されており、四隅には斜めに出る肘木が配される。その上の縁は縁葛を持ち、更にこの上に高欄が巡る。高欄は、地覆、平桁、架木が表現されている。全体は唐様であるが、四隅には和様の擬宝珠が表現されている。縁の上に第一の長押（下長押）が配され、唐草模様の装飾をもつ小壁の上に第二の長押が乗る。この上に小壁の層のものより一回り細い柱が四隅に立つ。正面と背面の壁の中心は割り貫かれており、周りを双竜の彫刻が装飾する。雲母ガラスがはめ込まれ、内容物が見られるようになっている。向かって左面には唐様の獅子舞演舞、右面には唐様の鯛曳童子の彫刻が施された壁が巡る。壁の上には第三の長押が乗り、この更に上に鶴の装飾が施された小壁が乗る。四隅の木鼻には獅子の装飾が施されている。この上に第四の長押が乗り、この更に上に牡丹に唐獅子の欄間彫刻が乗る。背面の欄間彫刻は取り外しが可能で、取り外すと担ぐための竿を差し込むための柄穴が開く。四隅には二手先組の斗栱、小壁の上には一手の斗栱が外観から虹梁に見える部材を支えるかのような形で配されるが、実際に支えているのは、中心が割り貫かれた天井板であり、この天井板全面で神酒杵の蓋である屋根を支える構造になっている。また、この板を神酒杵本体の柱から長方形の枳が貫き、屋根の柄穴に入る。外観から虹梁に見える部分は屋根と一体になっている。屋根は唐破風で、4枚の材を合わせたもので構成されている。段を20刻み、瓦葺屋根様に見せる。44本の化粧垂木を具え、正面及び外側には破風を具える。正面及び背面の桁の延長上には懸魚彫刻が配される。また、正面及び背面の軒下に、松に鳳凰の彫刻を配す。

神酒入は佐波理の金属製か。ほぼ円筒形で、上面径が下面径よりやや大きい神酒樽を模した形になっており、蓋は円錐の先を欠いた形に作られている。

(5) 保存状況

神酒杵・神酒入共に基本構造に大きな破損箇所は無く、形容に歪み等は見られない。神酒杵の化粧垂木の一部が欠損している。正面、背面の鳳凰を象った懸魚彫刻も脱落しているが、部品は残存する。正面（蓋）に「大山 神酒和久函」と墨書された保存箱が付属する。同函背面に「丙寅慶應二年七月吉日 彫工入間川了作 講元 増田左内」の墨書がある。

(6) 法量

神酒杵 総高 46.7、奥行き 46.0、屋根幅 45.4（単位：センチメートル）

神酒入 総高 11.2、上面径 11.2、下面径 8.9（単位：センチメートル）

(7) 製作時代

慶應2年（1866年）

(8) 由来

先祖より伝わっていたもので、いわれ等はわからない、とのこと。

(9) 写真資料



正面



正面彫刻



内部



屋根裏面

(10) 同種資料の所在地について

神酒杵は大山講が分布していた南関東一円に点在する。講中の参詣用具であるためか、大山山内には所在しない。なお、下線は各自治体の指定または登録文化財となっている事を示す。

(ア) さいたま市「武州与野町講中神酒杵付 瓶子 二点 担ぎ棒 一本」(与野郷土資料館蔵：1996 市指定文化財)

妻入宮殿、漆塗り、格子壁、脚付型、二基一対。錫製瓶子も二ロ一対。江戸時代末の作。

(イ) 鴻巣市上は組「神酒杵一組」(市教育委員会管理：1990 市指定文化財)

八棟造、鯢飾り、金泥彩色、欄干、雲形台座、二基一対。

(ウ) 鴻巣市元市町会「神酒杵」(元市クラブ)

七棟造、千木飾、亀と専任の彫刻、欄干、台座型、二基一対。表軒に「天下泰平」裏軒に「尾崎」の篇額有。

(エ) 熊谷市第一本町区「神酒杵」(町会山車庫：1968 市指定文化財)

唐破風切妻、欄干、台座型、二基一対。銀製壺付属。安政3年(1856)、大工飯田和泉守、彫物師飯田岩次郎製作。

(オ) 熊谷市第二本町区「神酒杵」(町会山車庫：1968 市指定文化財)

漆塗八棟、火頭窓、欄干、台座型、二基一対。錫製壺付属。安政5年(1858)、棟梁小林某製作。

(カ) 川越市連雀町丸連講神酒杵(熊野神社社務所)

唐破風切妻、白木造、台座型、二基一対。「東都彫工 嶋村俊表」の陰刻有。杵入れ木箱に「安政三年丙辰七月作之」の墨書有。

(キ)川越市青物講神酒杵（(株)埼玉川越中央青果市場）

唐破風切妻、漆塗、金箔押し、台座型、二基一対。川越の絵師江野煤青の天井絵有（煤青銘有）。黒漆塗の神酒樽付属、樽正面に「大山御神酒」の銘有。杵入れ桐箱に「安政四丁巳年（1857）七月吉日」の墨書有。

(ク)坂戸市大山講神酒杵（坂戸八坂神社神輿庫奥）

唐破風切妻、火頭窓、台座型。神酒樽、木箱共に二基一対、天秤棒1本付属。

(ケ)大田区新井宿神酒杵（新井宿春日神社）（1990年に大田区立郷土博物館複製製作）

唐破風切妻、漆塗、欄干、台座型。錫製徳利（一本飾り）付属。

(コ)大田区六郷神酒杵（六郷神社）（1990年に大田区立郷土博物館複製製作）

入母屋式、柱に昇り竜、降り竜の彫刻、白木造、欄干、台座型。徳利（二本飾り）がかつて付属した（現物無し）。

(サ)多摩市蓮光寺赤坂講中神酒杵（富沢家旧蔵：パルテノン多摩郷土資料室）

着脱式格子切妻屋根、漆塗り、格子壁、脚付型、二基一対。錫製樽（3個飾）付属。

(シ)八王子市南町町会「南町の御神酒杵」（町会神輿庫蔵）（1970：市指定文化財）

覆屋根付唐破風切妻、胴部全面竜の透かし彫り、欄干、台座型、二基一対。

(ス)八王子市八幡一・二丁目町会「八幡町の御神酒杵」（同町、馬場正平酒店蔵、2002：市指定文化財）

八棟造、塀巻、台座型、一基のみ現存。宮大工小町若狭源金義（糸太郎）と彫工牧田己之輔作の箱書有。

(セ)板橋区「向原八雲神社信仰関係資料」御神酒杵含（向原八雲神社蔵）（2009：区登録有形民俗文化財）

着脱式格子切妻屋根、漆塗り、格子窓、脚付型、二基一対。

(ソ)川崎市登戸神酒杵（登戸稲荷神社）

唐破風切妻、白木造、正面花頭窓、軒に鶴亀の彫刻。杵の他に「登戸 御神酒講社」と記した幟旗、提灯付属、錫製徳利（一本飾り）付属。

(タ)川崎市梶ヶ谷神酒杵（川崎市市民ミュージアム）

唐破風切妻側面花頭窓、白木造、欄干、脚付型。錫製徳利（1本飾り）付属。

(チ)川崎市久地神酒杵（川崎市市民ミュージアム）

唐破風切妻、白木造、欄干、脚付型。錫製徳利（1本飾り）付属。

(ツ)横浜市港北区北山町会神酒杵（山田村旧蔵：横浜市教育委員会歴史博物館準備室）

唐破風切妻、白木造、欄干、脚付型。徳利（2本飾り）がかつて付属した（現物無し）。

(11) 評価

大山講の神酒杵は、講員が大山詣りの際に神酒を持ち帰るための信仰用具である。大抵二基一対で、天秤棒の前後に神酒杵を差し込み、中に磁器若しくは金属製の徳利等を固定し、神酒を運搬する。背面に天秤棒が差し込まれる穴が開いていることから、前方の神酒杵に当たる。

本神酒杵は、入間川町在住の宮大工、甲田了作の作である。了作は、埼玉県指定文化財である入曽の獅子舞の獅子頭のほか、所沢市指定文化財である元町本町の山車及び新井町の山車の製作も手掛けている。特に元町本町の山車は、総檜造りの釘を使わない組み立て式であること、右柱に下り龍、左柱に上り龍、欄間に5頭の龍など多数の彫物を有すること等、本神酒杵と共通する点が多い。江戸後期から明治初期における武蔵国農村地域の信仰用具細工の様子を示す資料である。

参考文献（下線は神酒杵について直接言及しているもの）

- (1) 大山阿夫利神社篇『相模大山街道』 大山阿夫利神社、丸井図書出版 1987
明治 16 年の檀那場を網羅した『開導記』を収録。
- (2) 圭室文雄篇『大山信仰』 雄山閣出版 1992
近世における大山御師の成立、明治期における大山信仰の展開について紹介。
- (3) 北村敏「大山詣りの「神酒杵」について」『多摩のあゆみ』第 69 号 1992
南関東の神酒杵の所在調査成果の紹介。
- (4) 菅根幸裕「阿夫利神社と大山講」『千葉県の歴史』別編民俗 I 千葉県 1999
千葉県の大山講の様相を紹介。
- (5) 川越市立博物館『川越の大山信仰』 2001
川越市の大山信仰を紹介。
- (6) さいたま市立浦和博物館『特別展雨あめ降れふれーさいたまから大山へ』 2002
さいたま市の大山信仰を紹介。
- (7) 菅根幸裕「近世・近代の東総における相模大山信仰」『国立歴史民俗博物館研究報告』115
国立歴史民俗博物館 2004
神仏分離令後の大山講の再編成過程を考察。
- (8) 西海賢二『富士・大山信仰』 岩田書院 2008
近世中期以降の富士講と大山講を対比しながら紹介。
- (9) 関東民具研究会篇『相模・武蔵の大山信仰』 岩田書院 2011
 - (ア) 西海賢二「大山信仰の地域的展開－関東を中心に－」
大山信仰の地域的展開について、各地域の大山講と大山御師の役割を中心に論じている。
 - (イ) 加藤隆志「神奈川県相模原市域における大山信仰」
大山参詣者が盛んであった時期の様相を推測し紹介。
 - (ウ) 神かほり「東京都八王子市域の大山道と大山信仰」
八王子市域の大山信仰について紹介。
 - (エ) 橋場万里子「東京都多摩市域の大山信仰－神酒杵と木太刀奉納－」
神酒杵の具体的な使用方法を紹介。
 - (オ) 小野一之「大山が見える、大山に行く－東京都府中市域の大山信仰－」
府中市域の大山の信仰が、社会の変貌の中で継承、衰退していく過程を考察。
 - (カ) 榎本直樹「埼玉県坂戸市坂戸の大山講」
坂戸の大山講の実態を紹介。
 - (キ) 浅野久枝「大山への成人登山習俗の広がり」
大山への成人登山の習俗を持つ地域の分布とその特性について紹介。
 - (ク) 鈴木通大（編）「大山信仰関係文献目録・解題」
大山信仰に関する 80 以上の文献一覧。

2 埋蔵文化財調査報告

令和2年度狭山工業団地拡張地区基盤整備事業発掘調査業務

埋蔵文化財（鳥ノ上・小山ノ上・上双木遺跡）発掘調査実績報告書

文化財担当 三ツ木 康介

（1）調査業務の基本情報

- 1 契約件名 狭山工業団地拡張地区基盤整備事業発掘調査業務
- 2 遺跡名 鳥ノ上遺跡（市遺跡番号No.18・県遺跡番号 22-010）
小山ノ上遺跡（市遺跡番号No.19・県遺跡番号 22-011）
上双木遺跡（市遺跡番号No.37・県遺跡番号 22-077）
- 3 調査面積 約 2,100 m²
- 4 現地調査期間 令和2年4月1日～令和2年10月13日
- 5 調査主体者 狭山市教育委員会
- 6 調査担当者 狭山市教育委員会 調査担当 三ツ木康介

（2）遺跡の概要

鳥ノ上遺跡は埼玉県狭山市柏原字笹久保に所在し、西武新宿線狭山市駅から北西に約2km付近に位置している。遺跡は入間川左岸の台地上にあり、遺跡の範囲は南北約600m、東西約450mの広範囲に及ぶ。立地面の標高は南西端約64m、北東端約50mであり、南西から北東に向かって緩やかに傾斜し、遺跡東端部ではかなりの傾斜をもっている。

小山ノ上遺跡は狭山市柏原字小山ノ上に所在する、縄文・古墳・奈良・平安時代の集落遺跡で、遺跡中央には県道堀兼・根岸線が走っている。入間川左岸の台地上に位置し、標高は北端部で約54m、南端部で約61m、沖積地との比高差は約11mを測る。遺物の分布密度から推測するに、遺跡北東部が縄文時代、遺跡中央部が古墳時代、遺跡南半部が奈良・平安時代と考えられており、また遺跡北東部には古墳の石室で使用されたと思われる河原石が20個ほど見つかっており、古墳も存在していた可能性がある。

上双木遺跡は入間川左岸のやや奥まった台地上にある小谷の谷底から右岸斜面にかけて位置する。標高は谷底部で58m、遺跡東端部で62mほどある。遺物の散布状況は希薄だが、金くそ・とりべ片などが採集できていることから、製鉄に関係する遺跡の可能性もある。

（3）調査の経過

現地調査は令和2年4月1日から開始し、令和2年10月13日に終了した。本調査は前年度から継続しており、前年度に終了しなかった部分について調査を行った。経過は以下のとおりである。また、調査面積が広大だったため、便宜的に調査区を細かく区分けをして調査を行っており、調査区はA区から始まりAAB区まで分割している。今年度の調査はAX区からAAB区の調査を行った。なお、添付図面の遺構の略号は、SBが掘立柱建物跡、SDが溝跡、SKが土壌を示す。

4月1日（水）～5月11日（月）整理作業

既存建物の解体等による待機期間のため、令和元年度に出土した遺物の洗浄作業を実施。

5月12日（火）～5月26日（火）AX区

12日、重機を使用して、AX区の確認調査および表土除去および遺構確認を行う。確認調査の結果、土壌1基を検出。14日、調査開始。25日、全体清掃および個別写真撮影。26日、空撮および測量実施。調査終了。

5月22日（金）～6月9日（火）AY区

22 日、重機を使用して、AY 区の確認調査および表土除去および遺構確認を行う。確認調査の結果、掘立柱建物跡 4 棟、土壇 3 基を検出。25 日、調査開始。6 月 5 日、全体清掃および個別写真撮影。9 日、空撮および測量実施。調査終了。

6 月 18 日（木）～7 月 10 日（金）AZ 区

18、19 日、重機を使用して、AZ 区の確認調査および表土除去および遺構確認を行う。確認調査の結果、溝 1 条検出。23 日、調査開始。7 月 9 日、全体清掃および個別写真撮影。

10 日、空撮および測量実施。調査終了。

7 月 13 日（月）～9 月 28 日（月）整理作業

生活道路の迂回路整備等の待機期間のため、令和元年度に出土した遺物の洗浄作業や接合作業を実施。併せて、撤収のための不要物の処理等を実施。

9 月 28 日（月）～10 月 13 日（火）AAB 区

28、29 日、重機を使用して、AAB 区の確認調査および表土除去および遺構確認を行う。

確認調査の結果、溝 1 条、土壇 1 基を検出。10 月 1 日、調査開始。6 日個別遺構写真撮影。

8 日～9 日、全体清掃。13 日、空撮および測量実施。調査終了。

10 月 12 日（月）～13 日（火）撤収作業

機材撤収。現地調査終了。

（4） 調査成果の概要

検出された遺構は、奈良・平安時代の掘立柱建物跡 4 棟、溝跡 2 条、土壇 5 基である。

掘立柱建物跡は、AY 区で検出された SB-101 から 104 である。すべての遺構が一部調査区外もしくは工事の関係で調査が不可能だった箇所にかかる。規模は全て 2 間×2 間以上の建物である。主軸はどれも北を向いている。柱穴はほとんどが円形および楕円形を呈している。出土遺物は特に検出されていない。

溝跡は AZ 区で SD-14 が AAB 区で SD-9 が検出された。SD-9 はその他の区域からも検出されておりほぼ南北に直線を通っており、最終的には方形区画溝にぶつかる。SD-9 は今回の調査での遺物の出土はないが、元年度以前の調査部分において同一溝から須恵器等が出土しているため、時代的には集落のあった時代と同時期と考えられる。SD-14 は南北に延びる溝で、大半が調査区外を通っていると推測できる。造りは薬研堀である。遺物は出土されていないが、造りや覆土の状況から見て、集落と同一時期のものと想定される。

土壇は AX、AY、AAB 区で検出されている。形状は円形で、いずれの土壇もかなり浅い。遺物は出土していないため、時期等詳細は不明である。

（5） 現地調査のまとめ

平成 30 年 5 月から実施していた現地調査は、令和 2 年 10 月 13 日に終了した。現在は図面等の精査や出土遺物の調査などを実施しており、今後報告書の作成作業を実施する。

本調査で検出した遺構数は、奈良・平安時代堅穴住居 173 軒、掘立柱建物 99、溝跡 10 方形区画溝 1 条、土壇 222 基、柵列 2 条、集石土壇 4 基、性格不明遺構 5 基等である。整理作業の際に重複住居や掘立柱建物跡の精査で遺構数は増減する可能性はあるが、大幅な増減はないと思われる。

遺物は奈良平安時代の須恵器や土師器が大半で、鉄器や石製品も少数出土している。また、極一部に縄文土器の破片や石鏃が出土している

遺構の大半は奈良平安時代のもので、一部縄文時代の集石土壇や陥穴も少数検出されている。遺跡の特徴としては、縄文時代は、住居跡等は検出されていないため、当地域は猟場であった可能性が高い。なお、集落等は本地域の北約 100m のところにある智光山公園内に存在している。奈良平安時代は、出土遺物から 8 世紀前半から 9 世紀中ごろの集落と考えられる。特徴的な遺

構は、多数検出した掘立柱建物跡と調査地中央付近で検出した方形区画溝である。掘立柱建物は本地域においては住居というよりも倉庫としての機能を持ち、物資の集積所になっていた可能性が高い。方形区画溝は、区画内に建物等の痕跡は検出しなかった。ただし、区画内に基壇（盛土）が形成されていた可能性はあり、宗教的施設（神社もしくは寺院）が存在していたのではないかと考えられる。これらの倉庫群や方形区画溝さらには周辺の住居跡から出土した遺物等を詳細に観察することで遺跡の性格を把握することができると思われる。



狭山工業団地拡張地区基盤整備発掘調査全測図 (1/1,500)

3 博物館収蔵資料展示報告

博物館令和2年度冬期・令和3年度春期企画展

「収蔵品展 入間川商店街一繋がるモノ・人・街」展示報告

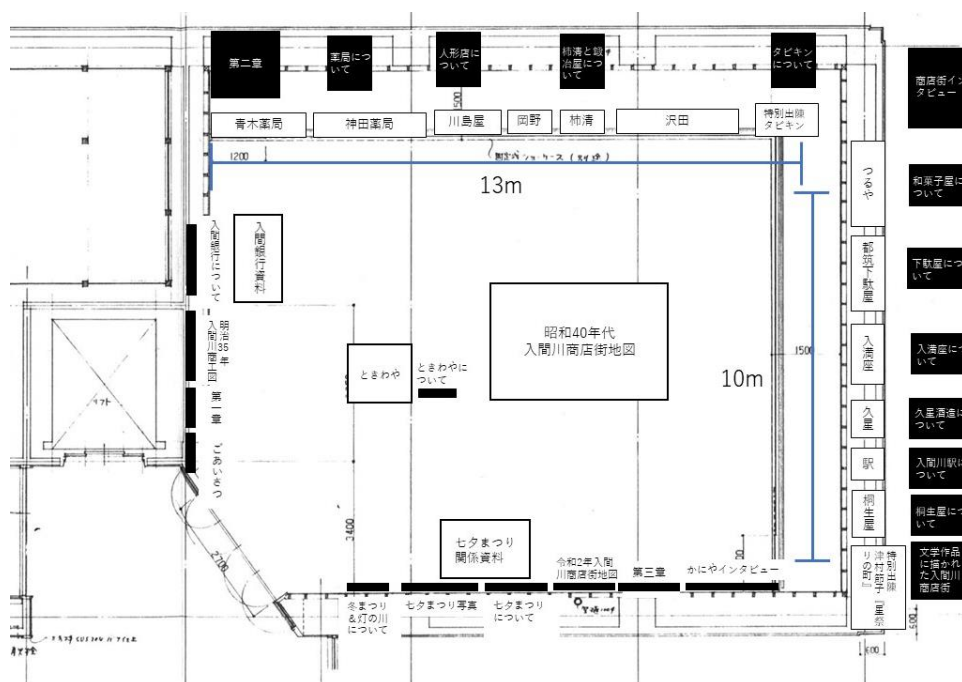
狭山市立博物館

肥沼育実・柳澤恵理子・山下春菜

はじめに

本稿は、令和2年度冬期から令和3年度春期にかけて開催された「収蔵品展 入間川商店街一繋がるモノ・人・街」（以下、本展示）の報告である¹。本展示は、当館の収蔵品の中から、特に入間川商店街の商店で実際に使用されていた道具や看板、商品などの品々を紹介した収蔵品展であるが、単に収蔵品を並べるだけでなく、「第一章 明治・大正期の入間川町一商店街の誕生」、「第二章 昭和期の入間川商店街一高度経済成長期の賑わい」、「第三章 平成以降の入間川商店街一そして令和の時代へ」と時代順に構成し、店ごとに資料を展示した。また、当時の写真もパネル化して展示し、街の歴史を振り返ったうえで、さらに具体的に商店街の移り変わりを可視化するために、明治35年（1902）の入間川商工図、昭和40年代（1965～1974）の入間川商店街地図、令和2年（2020）の入間川商店街地図を巨大パネルで作成し、展示した[図1]。

本稿では、本展示図録の章解説に加筆・修正したものを掲載するほか、本展示のために改めて調査した収蔵品のうち、担当学芸員が特に注目した資料について紹介する。そして最後に、本展示で見えてきた、地域の博物館が担うべき今後の課題についても述べていきたい。



[図1] 入間川商店街展 展示図面 (□は収蔵品の展示箇所、■はパネルを表す)

(1)「第一章 明治・大正期の入間川町―商店街の誕生―」と展示資料

ア 第一章の概要

第一章では、明治・大正期の入間川商店街を中心に取り上げた。当館の収蔵品にこの時期の資料は少ないが、商店街の原点として重要な時代であり、また明治 35 年（1902）の「入間川商工図」が残っている点からも、本展示の導入として必要な時代であると考ええる。

入口壁面に章説明パネル 2 枚及び拡大した「入間川商工図」²を展示、収蔵品は入間銀行で使用されていた資料を 4 点と、“ときわや”の手回しミシンを展示した。

イ 明治・大正期の入間川町について³

日本における商店街の起源について、平安京の町割に由来する例や、江戸時代の城下町、宿場町、門前町などに求めることができる⁴。入間川商店街の原点は、一説によると筏宿とされる⁵。江戸期、材木の流通には多くの場合、河川を利用した。山から切り出した材木を丸太にして筏を組み、上流から下流へと「筏師」と呼ばれる人々が流し運んでいくのであるが、この際、より多くの材木を流すために川幅に合わせて筏の幅を変える必要があった。この丸太の筏を組み替えるための寄せ場には、筏師が食事を取ったり宿泊したり、あるいは芸妓を呼んで遊ぶような店が集まるようになる。これが「筏宿」である。

江戸期、埼玉県西部である飯能・原市場・吾野・東吾野・名栗（現・飯能市）、高麗（現・日高市）で採れる木材は西川材と呼ばれ、多くは江戸で使われた。入間川村は西川材の筏を組み替える作業が行われる寄せ場であり、入間川流域を中心に、飲食店や宿が立ち並ぶようになったと考えられる⁶。筏宿として発展したことを念頭に「入間川商工図」を見ると、昭和・平成の地図ではほとんど見られない芸妓屋や料理屋が多く見られる。これは筏師たちを迎え入れ、栄えていた時代の名残である。

江戸期、現在の狭山市域の中心地として多くの人が行き来した入間川村は、明治 24 年（1891）に入間川町となった。明治期の狭山市域では、上広瀬の名主であった清水宗徳（1844～1909）が魚子織⁷の生産に力を入れた。宗徳は狭山で生産される魚子織の品質を向上させ「広瀬斜子」というブランドとして売り出し、販路拡大を目指す。「入間川商工図」に多く見られる魚子織に関係する糸繭商や生糸商は、この時期の入間川商店街の特色のひとつである。

また、日用品や日々の食材を扱う店も多くあった。明治 28 年（1895）に入間川駅（現・狭山市駅）が開業した事により、周囲に人々が集まり住み始める。住民を対象とした食料品や日用品を売り出す店は、この時期に増えてきたと考えられ、さらに駅前には鉄道貨物を扱う運送を担う店舗が立ち並んだ。

江戸期まで、買い物といえば家に行商人が品物を持ってきて、その中から選んで買うというスタイルが一般的だった。現在のように店が立ち並び、人々がそこに出向いて買い物をするというスタイルは明治から少しずつ浸透してきたもので、「商店街」という形を取り始めたのは 1930 年代からである⁸。「入間川商店街」は筏宿から始まり、徐々に生活する人々のための店や地場産業の店が集まって形成されていったといえる。

ウ 展示資料について

●入間銀行関連資料[図 2]

明治・大正期における入間川町や存在した商店に関する詳細が分かる資料はほとんど残されていないが、入間銀行については当館に収蔵品がある。

入間銀行は明治 15 年（1882）8 月、綿貫儀兵衛、増田忠順など入間郡内の資産家 15 名により入間川村で営業が開始された。当初は設立発起人が入間・高麗両郡にまたがっていたために「入麗銀行」としていたようだが、読みにくさから改名されたと考えられる⁹。明治期、狭山の織物業が好況を迎え糸繭商の営業が拡張していくと、貸付を行っていた入間銀行も順調に発展した。

入間銀行は、織物業の好況を契機に資本金を増やし、規模を拡大した。しかし、明治 37 年（1904）に勃発した日露戦争をきっかけに緊縮財政が続くと国内全体が不況になり、織物業や製糸業も打撃を受けた。その結果、多額の貸付金を回収できなくなった入間銀行も苦境に陥った。そのため、減資や取締役・監査役の更迭や相談役の新設など、大幅な機構改革を行わざるを得なかった。この後、大正 3 年（1914）7 月に勃発した第一次世界大戦の長期化に伴って一時的な好景気を背景に状況を打開しようとしたが、シベリア出兵の米価高騰や第一次世界大戦後の戦後恐慌によって再び景気は悪化した。これ以後、入間銀行の業績は回復することはなかった¹⁰。

業績が低迷した入間銀行は、昭和 3 年（1928）12 月に武州銀行に買収される。その後、武州銀行は飯能銀行・第八十五銀行・忍商業銀行と合併し、昭和 18 年（1943）7 月 1 日に埼玉銀行（現・埼玉りそな銀行）が開業した。

本展示では、当館所蔵の入間銀行の資料の中から 4 点を展示した。1 点目は銀行で使っていたとされるホチキスである。このホチキスは本体が鉄製で、側面にライオンが描かれている。土台の斧がクロスしたマークと「OSAKA JAPAN」の表記から、大阪にあった重見商店が大正期に製造・販売していたものと思われる¹¹。

2 点目は計貨器（一般的には「銭升」）と呼ばれる木製の四角く仕切られた枠のある道具である¹²。これは硬貨を数えるための道具であるが、仕切りの形が四角いことから、この計貨器は江戸期の貨幣を数えるものと分かる。明治期に入って日本の貨幣も全国的に変更・統一されたが、江戸期に使われていた貨幣が流通していた明治初期には、銀行内で使用されていたようである。

3 点目は入間銀行 20 年祭記念品の木杯である。この木杯は朱塗りの三段重ねの杯で、金で縁どられている。また、見込にも金で「入間銀行廿年祭」と意匠を凝らして描かれている。入間銀行が 20 周年を迎えた明治 35 年（1902）ごろは、入間川町周辺の織物業は好況であり、入間銀行が貸付を行っていた糸繭業界も盛りであったうえ、日清戦争における好景気の影響がうかがえる資料である。以上 3 点は常設展でも展示しているが、本展示を開催するにあたって改めて調査し、その成果を添えて展示した。

4点目の資料は「入間銀行第22回半季実際報告」で、明治26年（1893）上期の株主集会で提示された経営報告書である。入間銀行は同年12月より普通銀行として営業を始めた¹³。この文書からは明治26年（1893）上期の株主への一割配当が実施されたことが分かり、この時期の銀行が活況を呈していたことがうかがえる。



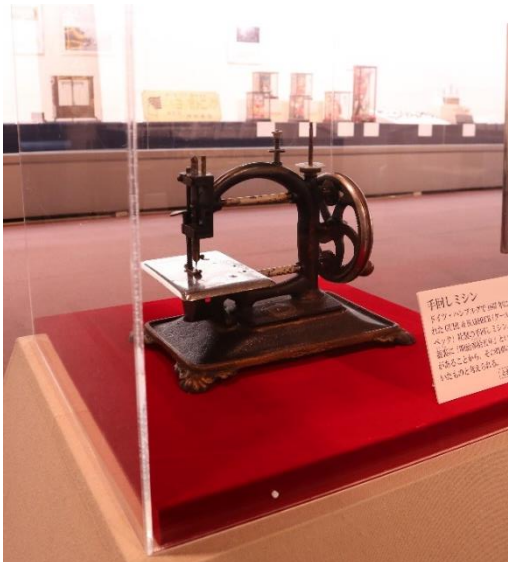
〔図2〕入間銀行関連資料。左から計貨器、ホチキス、入間銀行第22回半季実際報告、木杯

●ときわや 手回しミシン〔図3〕

「ミシン」という言葉は外来日本語で、英語の sewing machine（ソーイング・マシン）が訛ったものである。一般的に、18世紀末にイギリスのトーマス・セントが皮革用として環縫ミシン（工業用ミシン）を発明したことがミシンのはじまりとされている。その後、アメリカ人らによって研究開発が進められ、嘉永4年（1851）にアイザック・メリット・シンガーが現在使われているミシンの基である綻縫式ミシンの特許を取得したことで、実用的なミシンが世界的に広まっていく¹⁴。日本へミシンが入ってきた時期は諸説あるが、幕府開成所は慶応4年（1868）より、明治新政府は明治4年（1871）より本格的な輸入を始めた¹⁵。その時期に輸入していたのは、主にドイツ製ミシンであったようで、明治35年までにはアメリカのシンガー社製ミシンの他、数百種類のミシンを輸入していたという¹⁶。

“ときわや”は、戦後飲食店となったが、元は大きな洋品店であった。平成30年（2018）12月、店が閉められる際に当館の収蔵品となった。外箱の蓋裏に「明治参拾五年 寅九月拾三日 □君製 内田市蔵」という箱書があることから、このミシンは明治35年（1902）にはときわやにあったと考えられる。正確には「手回しミシン」と呼称されるもので、右についたハンドルを回すと針が上下に動くようになっている。机の上に置いて正座しながらでも使えるため、椅子が必要な足踏みミシンよりも狭い空間での利用が可能である。縦18.5 cm、横29.0 cm、高さ24 cmとコンパクトなミシンで、本体表面はややヤケており、ところどころに植物文様がほどこされているが、かなり薄くなっている。カーブ状の本体上部表面に「ORIGINAL EXPRES」、スライドプレートに「ORIGINAL MASCHINE GUHL&HARBECK

NAHMASCHINEN-FABRIK HAMBURG」「CH EXP IMP&BANK Co」、本体下部に「CHINA EXPORT-IMPORT-&BANK-COMPAGNIE」と彫られていることから、ドイツ・ハンブルグにあったグール&ハーベック社製の「ORIGINAL EXPRES」という名称のミシンで、日本へ輸出するにあたっては、当



時の中国輸出入関係の銀行が関わっていたと推測される。

幕末期から 19 世紀末にかけて主流であったドイツ製ミシンは、20 世紀に入るとシンガー社に代表されるアメリカ製ミシンにとって代わられるようになる。その理由として、アメリカ製ミシンの方が、運針速度が大きいといった点があったようだ。またこのころ、ミシンの動力自体が手回し式から足踏み式へとシフトしていった時期でもあった¹⁷。そういった点で、ときわや旧蔵手回しミシンは、19 世紀末の日本の店あるいは家庭でどのようなミシンが使われていたのかを示す貴重な資料であるといえるだろう。

〔図 3〕ときわや 手回しミシン

（２）「第二章 昭和期の入間川商店街—高度経済成長期の賑わい—」と展示資料

ア 第二章の概要

第二章では、昭和期の入間川商店街について取り上げた。収蔵品の多くが昭和期のものであったため、必然的に本展示のメインとなり、展示スペースも 13m と 10m の壁付ケース内を埋めることになった〔図 1 参照〕。会場は時計回りで観覧できるようになっており、昭和期の展示品は左から、青木薬局 7 点、神田薬局 2 点、川島屋（人形店）3 点、岡野人形店 3 点、沢田（鍛冶屋）8 点、柿清米穀店 1 点、タビキン（洋品店、個人蔵）3 点、つるや（和菓子店）10 点、都築下駄屋 7 点、入満座（映画館）2 点、久星酒造 2 点、入間川駅 2 点、桐生屋（乾物屋・魚屋）1 点の計 51 点である。最後に、特別出陳として狭山市ゆかりの作家・津村節子氏の著作『星祭りの町』（個人蔵）を展示した。展示内容の詳細は後述するが、『星祭りの町』は津村氏の自伝的小説で、作品の舞台は津村氏が戦時中に疎開していた入間川商店街である。フィクションを交えながら、当時の商店街の様子が鮮明に描かれているため、会場では「文学作品に描かれた入間川商店街」という題目で関連作品として展示した。その他、各店の説明と関連した写真、七夕通り商店街の人たちや、入間川商店街で最初の店を構えた“かにや”にインタビューした内容をパネル化して展示し、先述したように会場中央に昭和 40 年代（1965～1974）の入間川商店街地図を巨大パネル化して設置した〔図 4〕。

昭和期の地図を作成するにあたり、40 年代（1965～1974）を選択した理由は、この時期、入間川商店街が最盛期を迎えていたということと、かろうじて商店街の人々の街の記憶が残っていたからである。日本住宅地図出版が刊行した『狭山市住宅地図' 67』を参考に、入間川商店街に住んでいる（いた）人々からの情報提供により完成させることができた。



〔図 4〕昭和 40 年代の入間川商店街地図。地図のうえには当館のボランティアが製作した当時の店の再現模型を配置した。

イ 昭和期の入間川商店街について¹⁸

現況の商店街研究において、店が集まる場所を「商店街」という一つの買い物空間として認識し、商店街としての組織活動が広がっていったのは、1920 年代から 30 年代にかけてだとする見方が一般的である¹⁹。昭和 12 年（1937）に日中戦争が始まり戦時経済統制が敷かれ、商店街は一旦衰退するが、第二次世界大戦が終わり、日本が高度経済成長期を迎えると、全国の商店街は飛躍的に発展する。この時期、首都圏の人口増加が進み、埼玉県では西武鉄道などの私鉄網の発展も相まって、県内の人口が急激に増加した。県民の所得も増えたことで、消費意欲が倍増し、商店街の需要が高まってくる。

狭山市は、まさに日本が高度経済成長期に入ったところ、昭和 29 年（1954）7 月 1 日に誕生した。新市の発足により商業の振興が期待されたが、当時商店街を形成していたのは市の中心地にあった入間川地区のみと言える状況であった²⁰。近隣市町村の商店街としては、隣接する川越市の一番街商店街がよく知られているが、入間川商店街と大きく異なる点の一つとして鉄道駅から離れていることがあった。そのため、川越市の商店街の中心は、次第に人の流れの多い駅前へと移行していくが²¹、入間川商店街の場合は商店が連なる場所に駅が開業したため、商店街の中心地は大きく変化することにはなかった。

狭山市は、昭和 32 年（1957）度より「狭山市新市建設計画基本計画」を出し、商工業の振興のため商店街の美化や商工会議所の設置、優良工場の誘致などの政策を打ち出し始める。具体的には、小売店の経営合理化および店舗の整備、街路灯の設置などであった。入間川商店街においては、昭和 29 年（1954）にいち早く、街の美化活動の一環として現在の七

夕通り商店街の辺り一帯にネオン灯を設置し、商店街のイメージを一新させた²²。

昭和 35 年（1960）には狭山商工会が発足され、市内の小売業及び卸売業の販売額は年々上昇していく。昭和 40 年（1965）に商工会によって行われた消費者アンケートによれば、ファッションや高級品などは、東京都内や川越、所沢など市外で購入する傾向が高まってきたのに対し、酒や味噌、野菜、医療品、書籍、文房具などの日用生活品に関しては市内で購入している人が多かったようである。入間川商店街は、日用生活品を購入する場として、地域の人々の暮らしとともに発展していったことが分かる。また、このころ、通りごとに「商店会」が設立され、「七夕通り商店街」「天神通り商店街」などと細かく分けられ、それぞれで活動するようになった。

ウ 展示資料について

● 沢田 金山様[図 5]

当館の収蔵品の中で、沢田（鍛冶店）の資料は比較的量が多い。同種の資料で形や大きさが異なるものが多いためであるが、その中でも目を引いたのは「金山様」という資料である。「金山様」は基本的に、黒く塗った木の板にカミソリやクワといった金物を象ったミニチュアが刺さったものである。金物のミニチュアの種類・数は資料によって異なる。また木の板の中央には太い釘が刺さっている。このような「金山様」は 13 点収蔵されており、大きいもので金物が 7 種類刺さっているもの（縦 29.5 cm、横 36.0 cm）から小さいもので金物が 3 種類刺さっているもの（縦 30 cm、横 29.2 cm）まであり、刺さっている金物の種類や数には規則性はなく、大きさも異なっている。寄贈された当初、沢田から「鍛冶屋の神様を祀るために店の梁に打ち込んでいた」「店でその時作製していた商品をミニチュアにして刺していた」と伝えられている。



[図 5] 沢田 金山様

「金山」とは「金山彦」すなわち鉾山の神のことである。しかし、鍛冶屋では当館の収蔵品のような形のものを作っていたのか、またどのように祀っていたのか等の詳細はわからなかった。調査に当たりインターネットで「金山様」について検索したところ、現在も鍛冶店を営んでいる野口鍛冶店（久喜市）のブログ内²³に、12 月 8 日に「金山様」をまつるという記述、また、当館の所蔵品と類似した「金山様」が、神棚に赤飯・ミカン・御神酒とともにまつられている写真が掲載されていた。以上の経緯から野口鍛冶店に連絡し、このブログに掲

載されている「金山様」とはどのようなものなのかについて、聞き取り調査をした。

野口鍛冶店によれば、「金山様」は鍛冶屋や火を扱う人々の神様であり、祭日である 12 月 8 日に職人の無事を祈って祀る。神棚にある「金山様」は野口鍛冶店で作製したものではなく、別の工場に依頼して毎年作っていたものだが、現在はその工場が廃業してしまったため、毎年同じものを使いまわしている。刺さっている金物のミニチュアは、鍛冶屋で作製していた商品象を象っていたという。

以上の野口鍛冶店の聞き取り調査を踏まえると、1)「金山様」は 12 月 8 日に鍛冶屋の神様として祀るものであること、2) 刺さっているものは一般的にはその店で商品として作製していた金物を象った鉄製のミニチュアで、刺さっている金物の種類や数は店や作製された年代によって異なること、3) 沢田では毎年作製し、店の梁に釘で打ち付けて飾っていたということが明らかとなった。

本展示では、右からナタ・トンビ・マサカリ・クワ・カキ・カミソリ・カマの 7 種類が刺さった「金山様」とカミソリ・ハサミ・デバの 3 種類が刺さった「金山様」の 2 点を展示した。

●つるや 和菓子型枠[図 6]

「和菓子型枠」は「菓子木型」ともいい、和菓子を形作る際に用いられる道具で、木型に材料を詰めて菓子を装飾し固めデザインを作る。文久 2 年 (1862) に刊行された『古今新製名菓秘録』第二編には、江戸期から木型を利用して菓子づくりが行われていたことが記載されている。木型には様々なデザインが手作業で彫られており、落雁などの干菓子、練り切り、饅頭などの和菓子を作る際に用いられる。菓子木型の柄は、実際の菓子のデザインと左右や凹凸が逆向きとなる為、繊細かつ高度な技術が必要とされる。近年では菓子木型を作ることができる職人が全国で数人しかおらず²⁴、そのため菓子木型は貴重な資料といえるだろう。当館では工芸技術を用いた菓子木型を 40 点ほど所蔵している。当館で所蔵している菓子木型は入間川商店街で商いを行っていた“つるや”という和菓子屋で実際に使用されていたものである。慶事や仏事の際の引菓子などもつくっていたため、鯛、寿留女、鶴亀、蓮の花などの柄が多く、特に鯛の木型には食紅の朱色が残っていることから、すあまのような菓子をつくるためのものと考えられる。その他、季節の花柄や吉祥模様などの木型がある。



昭和期に入間川商店街には 10 軒ほどの和菓子屋があった。市内でもよく知られている“亀屋”“かにや”は商店街の中心地にあり、現在も営業している。

[図 6] つるや 和菓子型枠

●津村節子『星祭りの町』（個人蔵）

津村節子氏は昭和3年（1928）に福井県で生まれた。昭和14年（1939）、体の弱かった津村氏の健康状態や姉妹の進路等を考慮し、一家は東京に転居する。昭和16年（1941）から太平洋戦争が開戦し、府立第五高等女学院に進学していた津村氏も、三年生に進級する頃には勤労奉仕・学徒動員に駆り出されるようになった。昭和19年（1944）より母方の親戚を頼って入間川町（現狭山市入間川）に疎開し、ドレスメーカー女学院を経て、昭和23年（1948）には入間川商店街で姉と洋裁店「ボン」を開店した。昭和26年（1951）、学習院大学短期大学部文学科国文学に入学する。この際、洋裁店は閉店した。作品の発表を続けながら同じく作家の吉村昭（1927-2006）と結婚、出産を経て、昭和40年（1965）『玩具』で芥川賞、平成2年（1990）『流星雨』で女流文学賞、平成10年（1998）『智恵子飛ぶ』で芸術選奨文部大臣賞、平成23年（2011）『異郷』で川端康成文学賞など、多数受賞した。平成28年（2016）には文化功労者として顕彰されている。

『星祭りの町』（新潮社、初版1999年）は、津村氏の自伝的小説で、主に終戦から津村氏が学習院大学短期大学部の受験を決意するまでを描いている。書籍は津村氏の親戚である小高喜正氏から借用し、また、解説を執筆するにあたっては津村節子氏ご本人から許可をいただいた。『星祭りの町』で特筆すべきは、津村氏が疎開してきた入間川町の様子を、入間川商店街の内側から書いている点である。当時の入間川町は陸軍航空士官学校が米軍に接收され、多くの米兵と関わりを持った地域であった。両親を亡くしていた津村氏は自活のために親戚が開いた米兵向けのスーパーショップを手伝い、またドレスメーカー女学院を経て、姉妹で洋裁店を開いている。入間川商店街で米兵相手の新たな商売を講じ、戦中は自粛されていた七夕祭りを復興するたくましく戦後を生き抜いた人々が生き生きと描かれている。以下は、展示会場に設置したパネルの解説文である。

文学作品に描かれた入間川商店街 津村節子『星祭りの町』（新潮社、1999）

作家の津村節子氏（1928～）は、両親を亡くしたのち、昭和19年（1944）、16歳の時に姉とともに東京から入間川町に疎開してきた。津村氏の自伝的小説『星祭りの町』は、終戦を迎える昭和20年（1945）8月15日の静まり返った入間川町から始まる。

津村氏は、母方の実家である遠藤呉服店の近く（昭和の商店街の地図上ではタキシマ（プラモデル）の裏）に住んでいた。町の近くにあった陸軍航空士官学校はジョンソン基地となり、入間川町にも多くの進駐軍が訪れるようになる。津村氏はその急激な町の変化を、

製茶と養蚕が盛んだった町、その昔は、鎌倉時代から室町中期にかけて、鎌倉街道の交通の要衝として栄えていた古い町、入間川の川沿いに発展した細長いのどかな田舎町は、ローマ字の看板と、カーキ色の服にハロー帽をかぶった青い眼の兵隊達と、濃い口紅の女達に浸食されはじめ、様相を変えていった。（『星祭りの町』）

と描いている。津村氏の親戚である遠藤呉服店も、「フジ屋洋品店」や「岡野雛人形店」といった数軒の商店主で集まり、進駐軍相手の土産物店「イルマガワスーパーベニアショップ」を開店した。津村氏も進駐軍相手に慣れない英語を使いながらこの店を手伝った。

昭和 23 年（1948）、津村氏は目黒に建てられたドレスメーカー女学院（現・ドレスメーカー学院）に入学し、洋裁を学ぶ。卒業後、その技術を生かして開いたのがボン洋裁研究所（『星祭りの町』では「グレース洋裁研究所」）である。洋裁店は昭和の商店街の地図上の八幡神社参道近く、吉沢ガラス店とよしのやの間にあったようである。姉妹三人で切り盛りした洋裁店は、ジョンソン基地の婦人たちの間で評判となり、繁盛する。

小説では入間川の七夕祭りにも触れられている。終戦の翌年、3 年ぶりに開催された七夕祭りの準備を手伝う様子や、ボン洋裁研究所が七夕祭りに参加し、紙で作ったウエディングドレスの七夕飾りを作る様子が描かれている。

本展示において津村氏と著作『星祭りの町』を取り上げたのは、一人の少女の目を通した戦後の入間川商店街の姿を来館者へ広く伝えたいと考えたからである。『星祭りの町』に描かれる入間川町の戦後の姿は、フィクションの形をとっているものの、商店街における「証言者」が年々減少している中で貴重であり、入間川町の歴史を考える上で重要な要素の一つである。本展示は当館の収蔵品と入間川商店街の方々の証言から、時代と共に移り変わる商店街の生活と文化を追うことを目的としていた。『星祭りの町』は著者の体験に基づいた作品であり、展示物だけでは得られない商店街の人々の営みや米兵へのまなざしといった、当時の入間川町・入間川商店街のよりリアルな情景について非常に良く分かり、興味深かった。

また、津村氏が狭山市に縁が深いことは、世間一般には未だに周知されていないように感じる。狭山市の町おこしの一環として、『星祭りの町』を活用できないか、今後の課題として考えたい。

（３）「第三章 平成以降の入間川商店街 ―そして令和の時代へ―」と展示資料

ア 第三章の概要

第三章では平成期以降の入間川商店街を取り上げ、主に七夕まつりを中心に商店街の活動やイベント（入間川冬まつり、灯の川）をパネルで紹介する展示とした。七夕まつりに関連する収蔵品を２点（「入間川七夕まつりポスター」「入間川七夕祭大煙火プログラム」）展示し、併せて歴代の七夕まつり写真²⁵をパネル化した。また、第一章と第二章に続き、令和 2 年（2020）12 月現在の入間川商店街地図を作成。こちらは『ゼンリン住宅地図 狭山市』（2020 年 3 月発行）並びに Google map を参考に制作を行った。

イ 平成以降の入間川商店街について²⁶

全国的に商店街は 1980 年代半ばから 90 年代には衰退傾向が顕著となる。その要因として、90 年代半ば以降ショッピング・モールやコンビニエンス・ストアの増加、近年では経

営者の高齢化に伴う後継者問題などが挙げられる²⁷。

入間川商店街は現在も狭山市駅西口に位置し、狭山市の観光イベント「入間川七夕まつり」のメイン会場にもなっている。聞き取り調査によると、「七夕通り」と称されている通りには、「七夕通り商店街」があり、昭和40年代（1965～1974）までは「本町通り商店街」、昭和50年（1975）ごろは「狭山一番街」とも呼ばれていた。

平成20年（2008）度より行われた「狭山市中心市街地活性化推進事業」により、狭山市の中心市街地である商店街も新たな動きを見せている。まずその一つに挙げられるのが、電線の地中化である。商店街の一部が整備され電線が地中化されたことにより、商店街では店舗外に電動式日除けテントが設けられた。そして全国的に社会問題にもなっている商店街の空き店舗問題に関しては、入間川商店街では空き店舗を積極的に活用した貸店舗「たまり場ショップいるまおい」の運営も行っている²⁸。1階を店舗、2階をコミュニケーションルームとして、年間を通じ個人や各種団体・サークルに店舗を貸出す。美術品などの個展、雑貨などの展示販売などに活用され、他にも月に一度コミュニティーカフェが開かれている。このように空き店舗を活用することで、商店街の活性化に努めている。新しい大きな二つの動き以外にも、狭山市の中心市街地を活性化しようとする動きを今後も継続するとしている。さらに、商店街は伝統的な祭りの継続に力を入れている。狭山を代表する祭り「入間川七夕まつり」では、毎年狭山市駅西口・市民広場から商店街を中心に約1.5kmの沿道が、130本もの色とりどりの七夕飾りで埋めつくされる。商店街を彩る華やかな七夕飾りを見に、毎年多くの人が市内外から訪れている。

ウ 展示資料について

●入間川七夕まつり²⁹

関東三大七夕祭りに数えられる「入間川七夕まつり」の歴史は、一説では江戸中期から始まったと伝えられる³⁰。笹竹に短冊を結んで軒先に飾り、五穀豊穡や無病息災を願った。また、夏の日照りによる干ばつが起こらないように雨乞いとしての意味もあったようだ。当時は里芋の葉にたまった夜露で墨をすって短冊に願い事を書き、竹飾りの先端には魔よけの網の飾りを付け、七夕まつりが終わると七夕飾りは入間川に流していたといわれている³¹。

狭山市が誕生した昭和29年（1954）以降は観光行事の目玉となり、狭山市制50周年を機に平成17年（2005）に「狭山市入間川七夕まつり」と名称が変更された。以前は曜日に関係なく8月6日、7日の開催だったが、8月の第一土曜日・日曜日開催となった。工夫をこらした色とりどりの七夕飾りは商店街、事業所、市民が出品したもので、毎年、来場者投票の「竹飾りコンクール」が行われている。通り沿いは多数の露店で埋め尽くされ、各所で阿波踊り、民謡流し、小学生によるブラスバンドパレードなどが催される。また、夜になると昼間とは一味違ったライトアップされた七夕飾りを見ることができ、祭のフィナーレ「納涼花火大会」では約3,100発の花火が入間川に打ち上げられる。令和2年（2020）の祭りは開催されなかったが、狭山市駅西口市民広場には「コロナに負けないがんばろう狭山」とメッ

セージが書かれた七夕飾りが飾られた。

●入間川七夕祭ポスター[図 7]

昭和 24 年（1949）の七夕祭宣伝ポスターである。当時の七夕祭は、入間川商工会が主催し入間川町が協賛して開催された。手書きのイラストを印刷したもので、サイズは縦 37.2 cm、横 53.5 cm。ポスターの半面には七夕の笹飾りが描かれており、全体が青色をベースと



[図 7]入間川七夕祭ポスター

したデザインである。「西武線入間川駅下車」「池袋・高田馬場より」「西武鉄道」と描かれていることから、このポスターは西武鉄道が集客を見込んで作成されたものと考えられる。また、「入間川七夕祭」「8月6日7日」「入間川駅」と記載されており、名称が変更される前のものと推測される。「関東随一」と書かれていることから東京や他県からも観光客が訪れていたのではないかと考えられる。

●入間川七夕祭大煙火プログラム[図 8]

昭和 25 年（1950）8 月 6・7 日の七夕祭りにて入間川の河川敷で行われた花火大会のプログラムである。主催は入間川商工会で協賛は入間川町と記載があり、これは祭りと同じである。プログラムには打ち上げる花火のサイズと本数、協賛名、打ち上げる時間帯が書かれている。花火のサイズは、尺玉（10 号玉）約 30cm、8 寸（8 号玉）約 24cm、7 寸（7 号玉）約 21cm、5 寸（5 号玉）約 15cm、4 寸（4 号玉）約 12cm、3 寸（3 号玉）約 9cm があり、店によって異なっている。その他、祭の始まりに祝砲を担当した店もあった。協賛している企業や店をみると、亀屋菓子店、福助足袋、久星酒造株式会社、足袋金、成木屋材木店、埼玉銀行入間川支店、川島屋、神田薬局など、本展示で取り上げている店も多いことが分かる。このプログラムは、昭和 20 年代当時の商店街にどのような商店があったのかを読み取ることができる、貴重な資料であるといえる。

入間川七夕祭大煙火プログラム	
主催 入間川商工会 後援 入間川町	
尺玉 (10号玉)	亀屋菓子店
尺玉 (10号玉)	福助足袋
尺玉 (10号玉)	久星酒造株式会社
尺玉 (10号玉)	足袋金
尺玉 (10号玉)	成木屋材木店
尺玉 (10号玉)	埼玉銀行入間川支店
尺玉 (10号玉)	川島屋
尺玉 (10号玉)	神田薬局
尺玉 (10号玉)	...

[図 8]入間川七夕祭大煙火プロ

グラム

(4) 展示の成果と今後の課題

本展示での全体的な成果は 2 点ある。まず 1 点目は、実際に商店街の人たちや、地域密着

の企業に聞き取り調査を行うことができた点である。昭和のブースでは店ごとに収蔵品を紹介していったが、店の説明文を執筆するにあたり、商店街の人々に話を聞くことができたことは大きな収穫であった。例えば、当初、人形店は商店街に“川島屋”と“岡野人形店”の2軒だと思いこんでいたが、話をうかがうと、看板を掲げていないだけで人形の部品をつくる職人の家が40軒ほどあり、商店街が隠れた人形の町として興隆していたことが分かった。同時に、狭山の産業・文化の新たな一面を知ることができたのである。

2点目は、本展示が「民俗資料の展示」としても機能していた点である。例えば、(2)ウで紹介した「金山様」は、当館の収蔵カードでは名称と法量、寄贈者程度の情報しか記載されていなかったため、実際どのように使用していたのか不明であったが、今回、他地域の鍛冶屋からの情報提供により、使用方法が明らかとなった。このような民俗資料は、資料保存と併せて、使い方やその資料の背景をいかに残していくかが重要であることを示唆している。多くの民俗資料は時代の中で使われなくなったものである。生きている人々が同時代に使っていたモノの使い方を「記録」することはしばしば見過ごされてきたが、今後の博物館の資料保存に当たっては、同時に記録することを意識的に行う必要があると考える。

上記2点目については、民俗資料をきちんと「記録」していくべきであるという課題も浮かび上がった。地域の博物館が担うべきもう一つの大きな課題は、やはり「資料収集」であろう。今回の収蔵品展では、主に昭和期の資料の調査・展示を行った。当館には昭和期の入間川商店街に關係する資料が多く収蔵されていたため、その様な展示構成となった。だがその反面、平成期以降の関連資料がなかった為に、第三章の展示を充実させることができなかった。地域に密接に関わる企画展を開催するにあたり重要なことは、地域資料の「収集」と「保存」である。本展示では、商店街が地域活性化のために今も行っている活動について紹介したが、それでも、(3)イの冒頭で挙げたように、高齢化など様々な要因により商店の閉店が進んでいるのが現状である。実際、本展示開催中に閉店した商店もあった。地域の博物館として当館ができることは、狭山市内の貴重な資料を継続的に収集し保存していくことであろう。収蔵庫のスペース等の問題もあるが、資料以外のものについては適宜デジタル化を進めるなどして場所を確保し、未来の資料の収集に備えていくことが肝要である。

さらに、本展示のように「公開」していくことも重要だ。今回、過去の商店街地図、および収蔵品を公開することによって来館者の方々より様々な情報の提供があった。地域史研究を発展させるためには、学芸員の研究だけでなく、地域の人々からの情報提供が必要不可欠である。今後は展示だけでなく、例えば収蔵品の公開データベースなどをつくることも視野に入れるべきだろう。以上のような取り組みで、本展示の副題でもあった、「モノ（＝資料）・人・街」は繋がっていくと考える。

注

- ¹ 本展示は、新型コロナウイルス流行による緊急事態宣言発令によって休館期間が長引いたため、令和2年12月19日から令和3年5月9日まで延長された。
- ² 『狭山市史』近代資料編（pp535-545）を元に作成した。
- ³ 第一章章解説の加筆・修正文
- ⁴ 満菌勇『商店街はいま必要なのかー「日本型流通」の近現代史』（講談社、2015年）。「商店街」が商店の集合体としてのみでなく、組織的活動が拡大するのは昭和期に入ってからである。詳細は本稿の2-2を参照のこと。
- ⁵ 『狭山市史』通史編Ⅰp647
- ⁶ 『狭山市史』通史編Ⅰp647
- ⁷ 現在、「斜子織」と表記されることが多いが、「入間川商工図」上では「魚子織」と表記されているため、ここではそれに従い「魚子織」とする。
- ⁸ 前掲注4 満菌氏 pp223-225
- ⁹ 『狭山市史』通史編Ⅱp209
- ¹⁰ 『狭山市史』通史編Ⅱpp209-214
- ¹¹ たいみち【連載】文房具百年#11「大正時代のホッチキス」後編（『文房具百年』（Web連載））（<https://www.buntobi.com/articles/entry/series/taimichi/008965/>）
2021年2月27日
- ¹² 文化遺産オンライン「銭升」（<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/411145>）
2021年2月27日
- ¹³ 『狭山市史』通史編Ⅱp211
- ¹⁴ 『増補版 服装大百科事典』下巻（文化出版局、初版刊行1969年）
- ¹⁵ 岩本真一「日本におけるミシン輸入動向と衣服産業の趨勢—20世紀転換期の大蔵省主税局編『外国貿易概覧』を中心に—」『大阪経大論集』第59巻第2号（大阪経済大学、2008年7月）
- ¹⁶ 前掲注15 岩本氏
- ¹⁷ 前掲注15 岩本氏
- ¹⁸ 第二章章解説の加筆・修正文
- ¹⁹ 新雅史『商店街はなぜ滅びるのかー社会・政治・経済史から探る再生の道』（光文社、2012年）／前掲注4 満菌氏
- ²⁰ 『狭山市史』通史編Ⅱp825
- ²¹ 『川越市史』第5巻現代編Ⅱ（川越市、1981年）
- ²² 『狭山市史』通史編Ⅱpp826-827
- ²³ 野口鍛冶店「鍛冶屋の嫁ブログ」（2013年12月9日）（<https://www.noguchi-kajiten.co.jp/site/event/2813.html>）2021年2月27日閲覧
- ²⁴ 動画「高松、歴史礼讃〜命ある限り菓子木型〜（平成30年2月17日）」（<https://www.youtube.com/watch?v=nX10eoFBhr0>）高松市公式チャンネル
TakamatsuMovie
- ²⁵ 写真は、当館蔵ほか、狭山市広報課より提供されたものがある。
- ²⁶ 第三章章解説の加筆・修正文
- ²⁷ 新雅史「商店街は滅びない」『地域研究』13（沖縄大学地域研究所、2014年3月）／満菌勇「商店街の歴史にみる「消費」と「地域」：「商店街はいま必要なのか」を問う」『地域経済経営ネットワーク研究センター年報』5（北海道大学大学院経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センター、2016年3月）／田原洋樹「地域商業が担うまちづくりへの参画—埼玉県川越市の取り組みを通して—」『明星大学経営学研究紀要』第15号（明星大学経営学部経営学科研究紀要編集委員会、2020年3月）

-
- ²⁸ 『狭山市中心市街地活性化基本計画 平成 24 年度～平成 28 年度』（平成 24 年 3 月）
「第 4 章中心市街地活性化の基本方針等、基本方針 4：まちの賑わいの創出に向けて P31」
(<https://www.city.sayama.saitama.jp/shisei/shisaku/sangyoukeizai/sigaichikasseika.files/tyuusinsigaichikasseikakihonkeikaku.pdf>)
- ²⁹ 文章をパネル化して展示
- ³⁰ 『入間川七夕まつり』（狭山市観光協会、2005 年）
- ³¹ 「入間川七夕まつりとは」（2017 年 7 月 31 日）狭山市公式ウェブサイト
(<https://www.city.sayama.saitama.jp/kankou/kanko/tanabata/tanabatayurai.html>)

令和2年度
狭山市文化財年報

令和3年8月16日 発行

発行 狭山市教育委員会
埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号
電話 04-2953-1111